

ある才能

その年の夏は最悪だった。

じりじりしながらカミュからの連絡を待ち、苛々し、何度もカミュの事を考えるのもうやめた、と思つてまた考える。

どうして？ どうして何も言ってくれないのか。どうして専科に行くことを止めてしまったのか。どうして電話を掛けてこないのか。

カミュの裏切りを知つてから十日後、俺はクイーンズベリでミズ・エヴァンスから出された楽典の追試を受け終わった。実技はともかく、専科に行つてから後、このままの知識ではお話しにならない高飛車に言われ、「追試試験を作つてもらえて光荣だと平伏しなさい！」など罵詈雑言と一緒に課題を山積にされた挙句、学校に居残つて無理矢理勉強をさせられたんだ。

「終りました！」と怒鳴つて、優雅に紅茶を飲みつつ読書を楽しんでいた試験監督官、ミズ・エヴァンスに解答用紙を突き出した。鉛筆をひっ掴んで筆入れに押し込み、ボタンとドアを閉めて教室を後にする。芝生の上を突っ走つた。がらんとしたスミス寮の中の階段を二段飛ばしに進んで、三人部屋の中に残つた荷物を両手に掴んでダンボール箱にぶち込む。

すれ違った人が振り向くくらい、酷い顔をしているつて分つてる。けれど、平気な顔なんて出来ない。にこにこなんて笑つてられない。

セーターやノート、教科書なんかを詰めたダンボールを一度思いつきり蹴とばして、蓋を閉めるガムテープを探した。散らかつた部屋の中を探しても見当たらなくて、箱の中身をまた全部床にぶちまけて探す。やつぱり見つからない。

仕方が無いので、もう一度ぶちまけた中身をちりとりゴミを集めるようにして詰めて、事務室に行った。テープを貫つて伝票に送付先、ニア・ソーリーの住所を書く。

「良い夏休みを！」

事務員のアレン・ダブトルが愛想良く言ってくれたけれど、俺の唇はゴム糊でピタリくっついてしまったラバーバンドのように、無意味に横や前にぐにぐにと動くだけで開かなかつた。人と目を合わせるのも避けて、びつたりとくっついた唇を突き出して部屋に戻る。

カミュが見たら、酷いマナー違反だつて思うに違いない。苛々した気持ちも、不機嫌も撒き散らしたいだけ撒き散らして歩いていくつて思うに決まつてる。きつと俺の事を軽蔑するし、怒るし、不愉快になるだろう。二年前みたいに。

でも、カミュに対しての怒りや敵意を強く思つていなきゃ泣き出してしまひそうで、それを我慢するには意地の悪い気分であるしか方法がない。

カミュの弟のフィルやイギリスに残つたカミュのお父さんに、何度も連絡が欲しいとカミュに伝言を頼んだ。それでも、カミュからの電話は来ない。

カミュが、何故、落選したのでは無く、自分の意思で専科に

進むことを止めたのか、それを知ろうとすることだけがこの十日間でたった一つ俺を支えてくれた事だ。

カミュが、何をして、何を思っていたのか、俺はオケの仲間をはじめ片っ端からクイーンズベリーの人間に電話を掛けてカミュの行動を洗い出した。けれどそんな事をしたって、見えてくるのは俺がカミュに見ていたものと大差なくて、「カミュは熱心にピアノの練習をしていた」とか「カミュはピアノとGCSE両方に、もの凄いい集中力で没頭していた」という話ばかりだ。

どんな小さな事でもいい、カミュの様子がおかしかった事は無いのか、と尋ねても、みんな首をひねっていた。自分たちもそれどころではなかったし、と。

アイオリアだけが、最後に思い出したように一言付け加えた。「専科に行くの止めたって聞いた今なら、まあなんとなくカミュがピアノに没頭した気迫も逆に分るような気がするかな」と。

俺には、リアの言は抽象的過ぎて、それは胸の奥に積み重なった鬱憤と不安を更に強くする効果しかなかった。そして、ホームズの真似事が行き詰ったある日、決定的な情報が、思いがけない所から降ってきた。

いくら頭の中で怒りや苛立ちの暴風雨が吹き荒れていても、胸の下に重い不安と焦燥感の塊をぶら下げていても、楽器を弾くことは止められない。脳みそは必死にカミュの事を考える。体は染み付いている動きを繰り返す。気持ちと体がバラバラの

状態で楽器を弾くのは辛い。けれど毎日毎日手にして音を出してきたその行為は、もう呼吸をするようなもので、一日一回は音を聞いて腕と指を動かさないと呼吸が苦しくなる。

フラストレーションを煽るために楽器を鳴らしているようなものだ。けれど、分ついても、やらずには居られない。音楽棟の個室に籠つて腕を動かしていると、突然ノックの音が背中から響いた。

ピクツとして振り向くと、十二月に、怪我をしたアイオロスの代役を頼んだ専科のコントラバス奏者のトム・ストッパードがもう勝手にドアを開けて笑っていた。

「よう！」

トム・ストッパードは、細身で中音のウェールズ出身の学生だ。眼鏡の奥のヘーゼルの瞳が、真ん中から綺麗に赤茶、金、緑の三色のグラデーションになっている。学年は、アイオロスと一緒にだからもうとつく学校を出ていてもおかしくない。

怪訝な顔をしていたんだらう。トムは直ぐに種明かしをした。「俺の家は狭いからさ。楽器を練習するんならここの方がいいんだよ。大学もゴールドスミスカレッジに決まったからな。寮を探すのも実家からよりこつからの方が便がいいし」

壁に立てかけてあった折り畳みの椅子をカクンと広げて、トムはお喋りの態勢に入った。

「お前、転科合格したんだって？ 一応おめでとうと言っておこうか？」

転科の話は、今の俺には全然嬉しくない。けれど、またヒタ

りとくつついてしまつた唇をどう引き剥がそうか考えている俺なんてお構いなしに、トムはほとんど一人で話を進めた。目指すならどこの大学がいいか、それぞれの大学の特色やうちの学校からの進学者リスト。何日前かに専科に行くこと決まつたばかりでもう大学の話か、ポカンとしていたら、トムは真面目な顔をしてこつちを覗き込んできた。

「おいおい、お前は専科の他の奴等より三年も遅れを取つてるんだぜ？ たいていの奴等は学校の専任教諭の他に、師事する師匠を決めてるんだ。サマースクールやショートタームの特別講習会なんかにも、バンバン出て顔を売つてコネクション作つてる。大学は大抵師匠の系譜に沿つて選んでくし、取る方も当然弟子とか孫弟子とか優先だから、お前こんなトコで油売つてる時間、無いんだぜ？」

そう言つて、立て板に水の勢いで、イギリスで有名なヴァイオリン教授つていたら誰々で、その弟子は誰々で、何処に行つたらその教えを受けられるのか、という事まで親切に教えてくれた。

「あー、と、あ、ありがとう。よく、調べてみるよ、うん」

話の切れ目に、ごくりと唾を飲み込んでトムに礼を言つと、彼は満足そうに笑つて、ガシヤンと椅子を畳んだ。

「いやー、マジ、頑張れよ。お前は多分気付いていなかっただらうけど、学科試験の監督、俺がやつてたんだぜ？ 答案集めた時にチラツとお前の答え見たけど、酷かつた！ よくあれで受かつたな、と俺は感心したよ」

顔から、火がポツと燃え上がった。ミズ・エヴァンスにわいわい言われるのと違つて、なんだか勝手に羞恥心が胸の中でざわざわと騒ぐ。

「大抵、実技のマイナスを学科で補おうとするから、みんなそこそこ筆記はやつてくるんだけどな」

にやにやと笑いながら言われて、耳まで熱くなつた。

「でも、まあ、お前が最低記録つて訳でもないから安心しろ。今年は殆ど白紙つて奴がいたから。もつとも俺は、あれは抗議かなんかじゃないかと見てるがな。試験の間中、解こうともしてなかつたし。あ、試験官の位置からは受験者の行動つてよく見えるんだぜ」

「白紙？」

俺は顔を上げてトムを見た。

「ああ。名前と、最初の二、三問やつて、後は綺麗に手付かずだった。名前がフランスの有名な作家の苗子と同じだったからよく覚えてるよ」

「それつて、C、A、M、U、S？」

心臓が、喉にまでせり上がつて脈を打つていた。緩りのアルファベットが震えず喉から出た事を、我ながら凄くと思う。

トム・ストッパードは少し目を丸くして言った。

「そう。よく分つたな。知り合いか？」

その後、何を話したのか、どうやつて部屋に戻つたのか、覚えていない。

ただ、悔しくて、惨めで、怒りと憎しみで胸が燃え尽きてボ

ロポロになりそうだった。苦しくて、頭が割れそうだった。

誰も居なくなつた部屋の中で、カミュの座つていた机を睨んで立ち尽くしていた。

カミュは、スピーチデイの後でピアノ科の教授に辞退を申し込んだ形になつている。

けれど、そうじゃない。

カミュは、最初から転料なんてするつもりは無かつたんだ。

なんの為にかは知らない。けれど、転料するように見せかけていたんだ。

あんなピアノを人に見せ付けておいて、一緒に頑張ろうなんて言つておいて。

カミュは、「最初から」俺なんかと一緒に専科に行くつもりなんて無かつたんだ。

こんなに人が憎くて、苦しいと思つた事は無い。こんなに人間を恨めるなんて知らなかつた。いつも笑つていたくせに、優しそうな顔をしてたくせに、カミュの全部はみんな嘘つぽちだ。

カミュが俺にくれたあつたかいたいもの全部嘘つぽちだ。はじき出された答えは、まずまず俺の胸をぐちゃぐちゃに潰して、苦しくて痛くて、でももう涙も出てこない。

もう、カミュの事は考えない。カミュが俺のことを平気で騙せるのなら、俺だつてカミュの事なんか捨てる。

カミュには平気で出来る事でも、俺にとつてそれがどんな辛い事か、カミュは知らない。転料に合格した事がなんだつてい

うのか。自分は、こんなによろしくもなく敗者でいるつてい

うのに……。

楽器一つとリュックに詰められるだけ押し込んだ荷物を背負つて、俺はニア・ソーリーに帰つた。途中、ロンドンのユーストンの駅近くで妹たちへの土産に綺麗な絵本を二冊選んだ。

平日の駅構内は夏休休暇の時期だからか、人が多かつた。かさばる荷物持ちの俺は、何度も人にぶつかつて、その度に顔をしかめられたり、睨み返したりしながら、ようやくとヴァージントレインの自由席に落ち着いた。リュックとジジの楽器を網棚の上に載せ、サガから借りた楽器は足の間に挟んだ。

そこそこ人で一杯になつた列車は、ゆつくりとロンドンを滑り出し、灰色の道路や煤けた壁の間をぐんぐんと進んでいく。窓ガラスの向こうで流れる景色は、列車からピクチャーが転がり落ちていくようにも見える。

次々と消えていく景色のように、頭の中に大事にしまひこんだカミュの記憶を捨てられたらどんなにいいだろうと思つた。

思い出せば激しい感情に振り回されずにはいられない、それでもきれいに消し去る事も出来ない。

列車が北上するにつれて見える景色も徐々に変化して、グリーンが増えてくる。畑や農場の色だ。

ニア・ソーリーに着けばきつと故郷の景色がこのようする事の出来ない感情を洗い流してくれに違いない。いつだつて、緑と動物とたくさんの木はどんなものにも揺るがされない心の聖域だから。

オクセンホルムで乗り換え、ウインダミアまで小さなローカル電車で十五分。細長い箱型の乗り物の外は、もうロンドンのような建物も喧騒もない世界なのに、俺の気持ちはいつこうに濯がれない。

ウインダミアから、フェリーに乗って湖を横切りどんとどと故郷に近づく。フェリーの上ですつと風に吹かれているのに、風は胸の中のタールのような思いまでは吹き飛ばしてくれない。

フェリーを降りて半年振りの古里の土を踏んだとき、俺の心はこんな気持ちのまま大好きな場所に通りに辿り着いてしまった失望感で一杯だった。どんな時もこの田舎への帰還は喜びを与えてくれたのに、カミュー一人のせいでその大事な魔法は崩壊した。

小さな村の真ん中を走る道をゆつくりと登っていると、向かいからやって来た車がクラクションを鳴らした。

「どうして船塢場で待っていないの?!

」運転席の横の窓が、ガタガタと下がって母さんの良く通るイタリア語が耳を打った。

道の脇に寄せて停まった車に荷物を詰め込む時、母さんの目がサガの楽器に止まった。

「どうしたの、それ?」

「先輩に借りたんだ。二個持つているからって」

母さんは、何か言いたそうな顔をしたけれど、だまって俺の顔をスキャンして車をバックさせて方向転換すると家に向かつて走り出した。

家に着くと、カスバートのお婆が妹たちの面倒を見ていく

れていた。妹たちとまだ二歳にもなっていないシエトランド・シーブドックのチツロが飛びついて来て、やつと少しだけ顔の筋肉が動いた。妹達にお土産を渡して、夜寝る前に読んでやる約束をして、チツロの毛皮をガシガシと撫でてやると、裏に車を止めてきた母さんが入ってきた。

食事をするか聞かれたけれど、外に行つて農場を見てくると言つて家を出た。

キャプテンのお墓を見舞つて、空っぽの羊小屋や馬を放してやる囲いを覗いてから、ゆつくりと羊の放牧地に向かつて歩いた。軋々と小さなグループにまとまって草を食む羊たちを見ながら夕方、父さんが羊を追ってくるのに合流して作業を手伝った。

少し、驚いた事に、どうやら父さんの身長を俺はいつの間にか抜かしていたらしい。父さんはそんなに背の高い人ではないけれど、まさかもう自分が父さんの身長を追い越してしまうなんて考えてもいなかったから、まごついた。父さんも少し目を見開いて俺を見た。

頭の中に、去年カミューと一緒に付けた柱の印がぼつと浮かんだけれど、俺は直ぐにそれを消した。

もうカミューのことなんか、考えるものか。そう決めた筈だ。

子羊と親羊を分けて小屋に戻し、数を確認し、全ての動物たちに餌をやつてから母屋に戻った。もう夕食の支度は全部終わつていて、テーブルの上には焼きたてのロゼッタというイタリアの薔薇の花の形に似た食事パンやルッコラのサラダ、ラヴィオリ・ヌーデー、白インゲン豆のトスカーナ風スープ、グ

リーンプースとほうれん草のカセロール。

所狭しと並んだ料理の数々は、みんな俺の好きなものばかりで、まだ台所の奥で熱の入ってるオープンや冷やされているドルチェの姿から、母さんが何日も前から準備してくれていた事が知れる。

もつと、ちゃんとただいまって言つてキスすれば良かった……。

迎えるに来てくれた母さんにそつけない態度を取つた昼間の自分の行動に、胸が詰まった。だから必要以上にたくさん腹に料理を押し込んで、母さんを喜ばそうとした。

「半年で随分また背が伸びたけれど、この年頃の男の子つてやっぱりよく食べるのね」

空になった皿を台所に運びながら、母さんは満足そうに笑つた。妹たちが食器洗いを母さんと台所でしている間に、俺は父さんと一緒に農場を見回つて犬たちの様子を確かめる。

母屋に戻ると、寝巻に着替えた妹たちが、眠いのを堪えながら「絵本読んで」と訴えるので寢室に行つて読んでやる。瞬く間に寢息を立て始めた妹たちを起ささないように、そつと電気を消して部屋を出た。居間に戻ると、母さんと父さんは当然まだ起きていて、二人ですつきり片付けられたテーブルにハーブティーのカップを置いて座つていた。

母さんの青い目がすつと上がつて、俺を見た。

「ミロ、父さんから話があるから座つて」

体が、きゅつと縮んだ。黙つて自分の席に座ると、母さんが

奥から新しくカモミールのお茶を淹れてきてくれた。

父さんが、ふうつと溜息をついて口を開いた。サガの楽器に ついてだ。

俺は、簡潔に、母さんに言つたのと同じ事を言つた。ジジのヴァイオリンが壊れてしまつて、もう修理しても同じように板が割れてしまうだろうという事。困つていたら、楽器を二挺持つてくる学校の先輩が貸してくれた事。

父さんと母さんは顔を見合わせた。母さんは眉を少し寄せて言つた。

「それじゃあ、それは夏の間だけ借りているつて事なのね？ でも、楽器は学校でも貸してくれているでしょう？ 新しい楽器がどうしても必要なら一度マンチェスターに行つてみる？」

喉が、詰まつた。

ロンドンでバイナー工房を見た俺は、マンチェスターにある以上の楽器屋があるわけないつて分つているし、そして、うちにはロンドンのいい楽器屋で楽器を探す事なんて出来ない事も十分わかつてる。うちに来るのは、一番近場で大きな街のマンチェスターに行つて楽器を探すくらいなんだ。そんな所で売られている楽器、きつと学校にある楽器と大差ない。

三千ポンドしたつて、サガの楽器の足元にも及ばない。

俺は、心配そうに見つめて来る母さんの目からなるべく視線を逸らさないようにしながら言葉を押し出した。

あの楽器は、サガが一生貸与してくれるという事。俺が十八になつて成人したら、ちゃんと契約書を交わす予定である事。

サガはシュローズベリ伯爵の長男で今年成人して自分で財産を自由に出来る立場にある事。

母さんは空申の空気を飲み、父さんはサガの姓を聞いて軽く瞠目した。

「そんな、一生貸与つて……！ 一体いくら楽器を借りてきたの?！」

母さんは吸つた息を全部声にして首を振つた。俺は、楽器の値段なんて聞いたことも無かつたので正直に知らないと言つた。ただ、アイオロスや周りの反応からそれがちよつとやそつとでは「買えない値段」だつて察しているという事を伝えた。

「NO！」

母さんは強く、はつきりとした声で言つた。金額の分らない恐らくとても高価ものを借りていることそれも一生貸与など未成年の俺に親として許せる行為ではない、と。

「でも、あれはサガの物で、サガがいいつて言つてくれたんだ!」「自分で購う事の出来ないものを欲しがるのは強欲というものだし、身にそぐわない事は必ず破綻をもたらすわ。どうしても欲しければ自分で働いてお金を貯めてから買わせて貰いなさい! 弾く事を楽しむのはそれからだわ!」

「貴族にはそういう考え方もあるんだつ。人に貸して……一人で二挺持つていたつて同時には弾けない!」

「そういう世界の人にはそういうやり方もあるのかも知れないけれど、うちにはうちの考え方があつて、うちはやちよ! 何かあつた時はどうするの? お前に弁償が出来るの? 楽器は

クイーンズベリにいる間はクイーンズベリのものを使いなさい。大学に入る時に、父さんと母さんからお祝いとして新しい楽器を贈るわ」

お互い一步も引かないイタリア語での押取の最後に、ぴしゃりと母さんは言つた。瞳をらんらんと光らせて、親としての力でもつて話を打ち切ろうとした母さんを、これ程煩わしく思つた事は無い。俺は焦れた。

「学校のじゃ駄目だからサガから借りたんだ!」

「何が駄目なの! 第一、もうそんなに楽器ばかり弾いていられる歳でもないでしょう?」

「弾かなきゃ駄目なんだつ!」

俺は、テンプルをにらんで言い放つた。そして、ゆるゆると顎を動かして「新学期から、音楽専科に行くんだ」と言つた。

「Oh, Dioli」

掠れた母さんの叫び声が小さな居間に走つた。俺はじつと目の前のテンプルの木目を睨み付けたまま、母さんの顔は見れなかつた。

暫くの沈黙が続いた後、母さんが、つかえながら聞いた。どうして相談しなかつたのか、と。

「母さんに相談して試験に合格するわけじゃない! 自分で決めたんだ。学費も、奨学金が貰えるから迷惑はかけない!」

空気がみじつと重くなつた。暗い沈黙の後、ガタンと椅子が動き、母さんは居間から早足で出て行つた。

ちらりと、口元を強く手で押さえた母さんの姿が目に入り、

強く、胸が締め付けられた。しまったと思う。けれど、言ってしまった言葉はもう戻らない。

「話の続きは明日、お互い落ち着いた時にやろう」

父さんは静かな声で言つて席を立つと、母さんの後を追つてゆつくりと裏口から出て行つた。

たった一人残された居間で、俺は暫くじつとしていた。そのうち母さんと父さんの話し声でも聞こえるんじゃないかと思つて。二人が戻つて来て、謝れるチャンスが来るんじゃないかと思つて。

けれど、二人はどんなに待つても帰つて来ず、俺は軋む体を動かして三つのカップを洗つて部屋に戻つた。
誰かに傷つけられるのは悲しいし惨めだ。

でも、誰かを傷つけてしまうのは、もつと悲しくて惨めで、自分をえぐりつける。

服を着替えずに寝台に寝転がつて両手で目蓋を覆つた。

親に言えなかつたのは、少しか怖かつたからだ。自分の立てた目標がその価値を認めてもらえないのじやないかと怖かつたから。そして、もう一つ。これは、神聖な誓いだつたから。

俺はカミュに、そして自分に誓つたんだ。カミュと一緒に音楽家になる道を目指すつて。心の一番奥の所でそう誓つたんだ。演奏家になると決めるのは、とても怖いことだつた。

あと一年、自分の将来を決めるのには時間があると思つていい。漠然と、教師や獣医になる事を考えていた。

そういう事を一切捨てて、今この瞬間に自分の将来を決定付けてしまふのは怖かつた。

自分の可能性と、失敗する可能性、どんなに見極めようとしても判然としないものに賭けるしかない事が、怖かつた。

自分の恐怖心を直視して、それでもその恐れの高い道を選ぶのは、気持ちが悪えようもなく揺れた。自分がこんなに臆病だとは知らなかつた。

それでも顔を上げて決断出来たのは、勇気をくれたのは、カミュが居たからだ。

カミュが、真つ直ぐな瞳で未来を語つたからだ。

だから、俺も、真つ直ぐにその瞳と同じだけの強さを持つて自分の将来を見つめたかつた。

逃げずに挑みたかつた。

そして、そうしたんだ。

俺は、精一杯逃げずに、努力したんだ。

信じていたから。

音楽に対するカミュの、透明な力強い愛憎と信仰にもいた純粋な情熱を。

同じ物を、持ちたいと思つた。

同じ光を、見たいと思つた。

そうできるきつかけを、やつと掴んだと思つた。

それなのに……!!

ずっと止めていた涙が、また目尻からすると流れ落ち始めた。

カミュは、知っているんだらうか？

俺が、こんなに傷付いたって事を。

カミュは、考えてみたんだらうか？

俺が、こんなに傷付くって事を。

もうカミュの事なんて考えるのは止めようと決めたのに、

真つ暗な部屋の中で、カミュの心を探す。

どうして、どうして、と。

カミュは、知っているんだらうか？

人から傷つけられるより、人を傷つけてしまった時の方が何

倍も辛いって。

知らないのなら、知ればいいと思つて。

こんなに苦しんでいる自分の気持ちの、何倍もの痛みを味

わつて、理解すればいい。

俺がどんなに痛いか、その痛みを、カミュは知ればいい。

そう思つた。

翌日、明け方に少しだけうとうととして俺は鶏の声と朝の空気の匂いで目が覚めた。

目覚まし時計なんてなくても、ニア・ソーリーに戻ればちゃんと体は朝の仕事に合わせて目が覚める。

昨日、学校から戻った服そのままだったのを、上だけTシャツに着替えて外に出た。外の空気が、短い袖では鳥肌が立つくらいひんやりしていた。

羊小屋の前に行くと、もう戸口が開いていて犬たちが尻尾を

振つて出迎えてくれた。一通り牧羊犬のチームに挨拶を済ませると、そつと小屋の中を覗く。ジュツ、ジュツ、という鈍い音が聞こえた。

父さんが、母羊の搾乳をしていた。

俺は、一番に昨日の晩の事を謝らなきゃと思いつつ、ミルクを集めるバケツと腰掛椅子を手にして父さんが絞っている羊の

列と反対の列に腰を下ろして乳を搾り始めた。

最後まで、全部絞つたら、謝らう。

そう自分をごまかして俺は搾乳に没頭しているふりをした。

生あつたかいクリーム色の液体が、重くバケツに溜まっていく。

一頭ずつ順番に、場所をずらしながら絞つていく。羊たちは、おとなしく朝ごはんをくちやくちやくと食べている。

ふと頭を上げると、四角く空いた戸口の空間から金色の光が

朝もやの間をすり抜けて地面に真つ直ぐな光を下ろし始めているのが見えた。

あの光のように、いつも真つ直ぐな気持ちでいられたらいいのに。

両親を疎ましく思うのでなく、カミュを憎むのでなく。

やがて搾乳が終わつて、父さんが羊乳をぎあつと流し入れているタンクにバケツを運んだ。

一歩一歩父さんの姿に近づくと、俺は自分に謝らなきゃ、と

言い聞かせていた。

バケツを父さんに手渡した。

今だ。

そう思った、けれどその瞬間、口を開いたのは父さんだった。やっぱりお前がいると助かるな」と。

いつの間にか、自分より小さくなっていた父が、そう優しく言つて「ちゃんと昨日は寝たのか?」と尋ねてきた。

目に、一瞬で水の膜が張った。少しでも目蓋を動かしたら、薄いその膜は地面に向かつて零れてしまふそうだった。

俺は目を見開いて足元を見た。唾を飲み込んだら、喉がヘンな音を立てた。

「昨日は、ごめん……」

ようやく言えた言葉に、父さんが微笑った。心配が伝わった。

「母さんを泣かせるのはいただけいな」

そう言つて、父さんの手は二度俺の肩を温かく叩くと、子羊たちにミルクをやるために隣の小屋に移つて行つた。

俺は、羊小屋を掃除するためのフォークを手にとるとそれを握り締めて、熱く膨らんで痛む喉の奥が治まるまで小屋の中を掃除していた。半分くらい汚れた藁をどかせてしまふと、もう

大丈夫だと自分に言つて深く息を吐いて母屋に戻つた。出るときはまだ暗かつた台所に明かりが灯つていた。

勝手口から台所に入ると、母さんが唇をきつく引き結んでジャガイモの皮を剥いていた。目の周りがまだ腫れていて、緑

はうつすらと赤いみたいだった。

「おはよう」

と言つて母さんの横に立つた。

「ジャガイモの皮剥くの、手伝うよ」

母さんは、包丁をまな板の上に置いて何かを堪えるように黙つた。

父さんとそんなに背丈の変わらない母だけれど、ゆつくりと抱きしめた母さんは肩は記憶にあるどの母さんよりも細くて頼りなかつた。

「昨日はごめん。今日、もつとちゃんと話し合いたいんだけど、時間、作つてもらえる?」

母さんの腕が、ぎゅつと俺を抱きしめ返した。

母さんの額が押し付けられた肩口に、あつたかい水を感じた。やがて、音を立てて俺のほつべたにおはようの挨拶をした母さんは、濡れた目をつこり二日月にして言つた。

「料理が羊臭くなるからお前は父さんの仕事を手伝つて」と。

午後、一通りの仕事が終わっていた頃、母さんと妹たちをバギーに乗せて父さんが羊を放牧させている場所を尋ねた。母さんはピクニックバックにパニーニとRIZOのサラダ、チーズケーキを詰め込んだ。

ブランケットを敷いてランチを取つた後、妹たちの相手を手ツロに任せて、俺は今度はちゃんと両親に専科への編入の話をして書類を見せた。

それなりに長い話の後、父さんから一度きちんとサガの所に連絡を取る、Aレベル試験に向けての勉強もしつかりと行つ、

という条件で俺の編入は両親に認めてもらえた。

まるでクイーンズベリーでの生活の方が物語の中での出来事のように、ニア・ソリーでの牧場の生活は静かに体の中に戻ってくる。

これまでと違うことと言ったら、毎日母さんが煩く「楽器を弾け」と言うようになったのと、キャプテンの写っている写真を見たり、キャプテンと一緒に歩いた場所を一人で歩いていても、以前ほど胸に痛みが走らなくなった事ぐらいだ。

それから驚いた事もあった。プレップに入るまではそこそこイタリア語を話していた上の妹が学校に行き始めてからどんどんとイタリア語を話さなくなつて、つられて下の妹もイタリア語と英語混じりのへんな文法の言葉の口にするようになっていた。英語の文法をイタリア語に当てはめたり、イタリア語にある性を無理矢理英語にも押し込めて話しているのを聞いていると、こんな小さい頭でも色々考えているんだなあと感心する母さんはこのままヘンなイタリア語を話すようになってたらどうしようかと戦々恐々としているけれど。

そう、それから、サガの楽器。父さんがあれからサガに電話を掛けたら、「執事」なる人が最終的に電話口にて、「ただ今チエトウイド卿はスイスの避暑地にてご家族とお過ごしになられております」と言われて固まっていた。

父さんも一応は男爵の家で跡取りとして育つたはずなのだけれど、父さんに言わせれば男爵と伯爵では天と地ほど違つていて、その上こちらはスコットランドの田舎貴族、あちらはイングランドの伝統ある世が世なら王家に興入れ出来る地位と格

式のある家系で全くの別世界だそうだ。電話を終えた後、父さんはしてもいないネクタイを無意識に緩める仕草をして息を吐いた。

結局電話でサガと父さんは直接話せなかつたわけだけれど、それから一週間もしないうちにエア・メールでサガから父さんに宛てて丁寧な手紙が届いた。

父さん、母さん、俺、と回された手紙の内容は、俺の保護者への確認も無しに勝手な申し出をした事への詫び状と顔から火が出るくらい俺のヴァイオリンを褒めちぎつてくれているような手紙で、一体どんな顔をしてサガがこの手紙を書いたのか想像すると体中から汗が出た(もちろん、いつもと同じあのとびきり優しくてあつたかい綺麗な顔で書いたら違いなないけれど)。

母さんは、首席で、伯爵家の跡取りで、オックスフォードに進学するサガが俺の才能に期待していて、自分がその才能に一助になれる事に強く喜びを感じているという手紙を読んで大感激だった。

父さんは、そんな母さんを見て俺にだけ分る様な幸災を微妙に浮かべて見せた。けれど、直ぐに真面目な顔で「確かな人そうで良かったよ」と言った。まるでサガを疑うような発言に勢い込んで反論しようとした俺を、父さんは軽く指を上げて止めた。

「アーヴィング、人というのは万能ではないんだよ。お前から見るチエトウイド卿は尊敬出来る立派な人物だろう。けれど、私のようにお前の父親で、年齢も上の者から見ればまた違つた

見え方・見える姿があるんだ。お前が信頼する人物を、私たちも信頼したいと思うしよく知りたいと思う。けれど、お前から見える姿をそのまま私たちが共有する事は出来ななんだ。我々は彼と同じ学校に通う生徒の一人ではないし、お前のように若くもない」

父さんは、俺が返したサガからの手紙を丁寧にまた折りたたんで封筒に仕舞うと、ふっと笑った。

「でも、今回は、私もお前と同じ思いを共感出来るように嬉しいよ。彼は、とても立派な青年だ」

ゆつくりと腰掛けていた椅子から立ち上がると、父さんは俺の肩に手を乗せて言った。

「尊敬できる人からの好意には、精一杯の誠実さで応えなければな」と。

胸が、ぎゅっと痛んだ。

父さんの言葉を聞いて俺が思い浮かべたのは、サガが優しく笑っている顔ではなく、カミュの顔だったからだ。

精一杯応えた思いが踏みにじられた時、そんな時は、どうしたらいいんだろう？

暗い部屋の中から、午後の光で輝く外へと出て行つた父さんの背中を見て、見えない答えを探した。

そして、サガの手紙にお札の手紙を書いて投函した翌日、もう一通エア・メールの絵葉書が届いた。

真っ青にも見えるラベンダー畑と小さな灰色の教会の写真だ。写真の下に小さく「Abbaye Notre-Dame de

Senanque」と印刷された文字が見える。

写真を裏返すと、サガの流麗な筆記体とはまた違う、少し線の細い字でこう書かれていた。

"Hello Miro,

How are you?"

I'm traveling across southern France with my 94 years old grand mother and her family.

I hope you and your family and all sheep, horses, hens, and dogs are having beautiful summer in your town.

Enjoy the vacation,

C.R.B."

これを読んだ時の虚脱感は、絶望感にも似てた。

カミュは、俺が何度も連絡を取ろうとしていた事をフィルや父親から聞いている筈だ。それなのに、平気でこんな馬鹿げた絵葉書を送り付けてくるんだ……。

本気でこんな風にほっぽり出された俺が休暇を楽しめるなんて考えているんだろうか？

カミュは同じ事を、誰かにされてもきれいさっぱり忘れて夏休みを楽しめるんだろうか？

もう、本当に、考えるのもイヤだ。

飲みかけていたカツフェツラッテを一気に飲み干して昼食を終えると、絵葉書をゴミ箱に捨てて午後の仕事に出かけた。

夏は冬に痛んだ建物の修理や、牧草の刈り入れで農場は忙しい。特に牧草の刈り入れは冬の間羊たちの乳の出具合や

味、健康にも関わるからなるべくいい状態の草をたくさん蓄えておきたい。

父さんと二人で刈り取った草を纏め、干し、積み上げる。時には近所の農家の手伝いにも行きながらぎりぎりまでクイーンズベリに行くのを先送りにして九月、とうとう家を出なきゃいけない時が来た。

「本言に髪の毛切らなくていいの？」

「うん。くくれる方が面倒くさくなくていい」

何度も俺の髪に手を伸ばしてあちこちにはねている髪を挿えつげようとする母さんに笑ってハグとキスをして、半ベソをかいている妹たちにも鼻をこすり合わせてバイバイを言う。リュックとサガの楽器だけを持って列車に乗った。

空いている席を見つけて窓を開け、家族に最後のさよならを言う。

上の妹の手を握って、下の妹を片腕で抱えた母さんは、大きく振り返せない手の代わりに飛び切りの笑顔を見せてくれた。

「早くお友だちと仲直りしなさいよ！」

走り出した列車の風の向こうから、母さんの明るいイタリア語が届いて、俺はぎよつとして振り返った。

けれどプラットフォームに立つ母さんの姿は腕半分の大きさもなくなっていて、もうその表情は見えなかった。

この日の列車での移動は、七度目にして初めて全行程を遅延なく走って、クイーンズベリには夕方の五時前には着いた。二

ア・ソーリーからクイーンズベリへ最短の移動時間だ。

事務室に寄って、今学年の二人部屋の手を確認した。

下級第六学年になると、学生は二人部屋を貰える。夏休み前に相部屋希望者の名前を提出する事も出来るけれど、そんな事をしてバカな噂の的になるのは御免と、大抵の人間は申請しないで運をハウス・マスターの手に任せる。

肩に下げていた楽器を一度床に下ろして、スミス寮の部屋割り表を渡してもらうのを待った。

今年から、スミス寮にはロスも、サガもシユラも居ないんだ。ふと思った自分の考えに、途端に寂しくなってしまう自分が情けない。

「はい。勉強頑張つてね」

笑顔で渡されたスミス寮の名簿を、これまた笑顔を返しながら受け取って、俺は楽器を背負いなおした。

ざつと目を同学年の蘭まで走らせた。ウイリアム・バンキンとマイケル・ガーネットの名前が目止まる。マイクの奴がまた騒ぐだろうなあ。ちよつと噴出して、紙面に目を戻すと、その直ぐ下に自分の名前を見つけて、俺は固まった。

ポール・リッジウェイとミロ・フェアファックス。

嘘だろ?!

何度見直しても、タイプされた文字は消えたり移動したりもしない。

何だよ、これ?!!! 最悪だ!!! ポールが俺の事毛嫌いしてるの、ハウス・マスターのキャブテン・ベネットは知らないのか

よ？

俺は呻いた。

がっかりして他の奴等の名前を見ると、学年別リストの最後にアイオリア・エインズワースとカミュ・パロウという名前が見えた。

リアが、カミュと同室?!!

訳の分らない嫉妬と羨望が胸の中で渦巻いた。

一瞬、二人で示し合わせたのかと疑いもした。何バカな事考えてるんだって、直ぐに打ち消す。けれど、それでも、リアがカミュと同室だという衝撃は、ポールが自分のルームメイトだって事より重く俺に押し掛かった。

動揺を抑えきれないままミス寮に戻ると、丁度六時からの夕食の時間で、俺は慌てて部屋に荷物を置きに走った。部屋のドアは開いていて、中にポールは居なかった。

めちやくちや安堵して、そのまま急いで階下に入りて食堂に滑り込むと同学年の仲間を探した。直ぐに手を上げてくれたリアに気付いた。

ほっとして手を上げ返そうとして、リアの隣にある赤い色に気付いた。

心臓が、一度拍を飛ばした。

俺は努めてその赤い色を視界に入れないようにしてリアにぎこちない笑顔を返した。そして、まるで逃げるみたいに体の向きを変えてトレイに夕飯を積み上げて下級第六学年の集まっている机の端に腰を落ち着けた。

「おい！ ミロ！ 何してんだよ！ お前の分もうちやんと取つてあるんだぞ?！」

リアの声が反対の端から飛んできた。俺は、一瞬びくつとしようになつた体を着めて無理矢理唇を引き上げて叫び返した。

「悪い！ もう途中でランチボックス食べたんだ。それ、適当にそのへんで分けてよ！」

パカヤロウ！ そういう事はさつきと知らせとけ、つて無茶なリアの注文が飛び返つてきて、後はそれきりだった。俺は肩に入つた力を抜いて、ウイリアムやマイクの話に適当に相槌を打ちながら水でサラダを胃に流し込んだ。

首が、変に緊張している。意識してリアたちの居る方を向かないように必死になっている。ふとした事でも、カミュを視界に入れたくないと、体中が悲鳴を上げて訴えてる。

なんで、こんな……。まるで怯えるみたいに……。まるで、俺の方が悪い事をしたみたいじゃないか……。

悔しかつたけれど、リア達が食事を済ませて笑いながら俺の側を通つて食堂を後にするような状況は我慢できそうになかった。だから、俺はさつきと皿の中身を空っぽにして席を立つた。

ポールと相部屋の部屋に帰るのも気が重かつたけれど、カミュの顔を見るよりはマシだと思つた。

荷物を片付ける為だ、と自分を納得させてさつき出てきたばかりの部屋に戻つた。

先に小包で送つていた荷物は二つあるベッドのうち一つの方に寄せられていたから、この北側半分が俺の領域つて事だろう。

ダンボールの天辺に張り付いたガムテープを剥がして衣類、手持ちのテキスト、目覚まし時計、筆記用具など細かいものをベッドの周りや下の引き出し、机の上に片付けていった。

途中で戸口に人の気配を感じた。それは、なんの戸惑いもなく部屋に入ってきたから、ボールなんだろう。俺は、黙って自分の作業を続けた。キシッと、背中の方で椅子が人の重さに軋む音がして暫く、息を吸う音の後に、溜息と一緒に冷たい声が投げつけられた。

「一応、転料試験合格、おめでどうと言っておこうか？ フェアファックス」

振り返ってみたボールの青灰色の瞳は、軽く人を馬鹿にするような色を持っていて、俺はむっとした。

「お前も、歌、続けるんだってな。おめでどうって一応言っておくか？ それから、頑張れよ」

ボールは俺の最後の言葉に少し驚いたようだった。

ボールから良く思われてないのは知っているし、自分を嫌う人間を積極的の好きになれるほど俺は人間ができてない。

けれど、ボールが心から歌が好きだって事は知っているから。そして、あの綺麗な声はもう二度と彼の喉から出ない。それでも、ボールは歌い続ける事を選んだ。その選択を俺は尊敬出来るから、頑張つて、ボールが満足出来る声をまた手に入れられたらいいと思う。それは、偽りない本当の気持ち。

これで不愉快な挨拶は終わり、と俺はまたボールに背を向けてセーターに包まれたお菓子の缶を取り出した。中身は母さん

手製のレモンゼストがふんだんに入ったビスコッティだ。空っぽになったダンボールをべちゃんこにしてベッドと壁の間に押し込むと、今度はリュックの中から自家製チーズの入ったビニル袋を取り出した。

第六学年に入ると寮にある冷蔵庫が使えるようになる。それを母さんに言ったら結構沢山の羊チーズを持たせてくれた。ずつり重い袋をぶら下げて廊下に出て給湯室に行つて冷蔵庫を開ける。もうちょう七割以上詰まっていた。

これは、袋に名前を書いておかないとやばいかも。

俺は、手前に林立する、ジュースのペットボトルを押し退けて、冷蔵庫の一番奥にチーズの塊を押し込んだ。と、パンツと軽い何かが弾けるような音がした。

何だろうと思つてビニル袋を持ち上げたら、袋の底に半分割がれかかったカードがぶら下がっていた。

え？と思つてゆつくりと指を伸ばして冷えた厚紙を引張つて剥がした。

カミユの、絵葉書だ。捨てたはずの。

ラベンダー畑の写真の四隅を囲う白い無地の分部に、小さく母の手で「お友だちと一緒に食べる事！」と書いてあった。

……母さんっ!!

俺は呻いた。一瞬、母さんの想いが実現しない事に痛み感じ、その次にゴミ箱から拾われたこの絵葉書をどうしようかと思つた。部屋に持ち帰るのは真つ平だ。誰がこんな物を大事に取つてなんかおおくもんか。

俺は力の入った手で握り潰されてしまった絵葉書を見た。
こんな物はいらぬ。こんな物が欲しかったわけじゃない。
一度きつく口を引き結ぶと、俺は立ち上がった。

スミス寮は南北に長い寮で、部屋は東向きと西向きに並んでいる。ポールと俺の部屋は棟の南から数えて二つ目の西向きの部屋だ。南隣はウォルトで反対側は階段だ。リアは廊下を挟んで南向きの部屋。北よりの下級生の部屋の隣だ。

真つ直ぐに自分の部屋を過ぎて廊下を歩いた。気持ちは固く静かだった。ただ、体の中に、大きな熱の塊だけがあるだけだ。開けつばなしのドアの板をノックした。直ぐにリアが振り返ってはつと笑顔を浮かべて、歓待の意思表示をしてくれた。「よお!! G.C.S.E.どうだった? 今年はとうとうお前のお守りもお役御免だ。ポール相手に喧嘩なんかするなよ?」全開のリアの笑顔が、硬い表情のままの俺を見つうつと色を引いていく。

俺の目は、ピタリとカミュにだけ視線を合わせる。

俺の視線の先でカミュは今までと同じく、にっこりと笑って言った。

「部屋が分かれてしまっただけで、ポールとは専科同士きつとお互い刺激になるよ」

カミュのその「いかにもいい人」な笑顔とあまりにもカミュにとつて都合の良い言葉に、俺の中の熱が爆発した。

走るように部屋中を切つて進み、カミュの目の前、机の上に、

カミュからの絵葉書を叩き付けた。

何度も、カミュを睨みつけながら呼吸を落ち着かせようとした。

軋る顎の骨を動かして出した声は掠れた。

「……こんなの、要らない——!!」

俺は、大きく息を吸った。

「答えろよ! 何で、何で黙つてたんだよ。専科になんか行かないって……お前、夏休みの前には決めてたんだろ?」

視線でカミュの体を貫けるならそうしたい。絶対に嘘の答えなんて口に出さないぐらいに、本当のことしか言えないくらい。でも、カミュは一度目を瞬いて笑顔を消すと、それでも真つ直ぐに俺の目を見て言った。

「決めていた、というより、ぎりぎりまで迷っていたんだ。自分で納得がいくまでやってみて、それで僕には向いていないと思つた。夏休みの前には専科の可否はまだ発表されてなかつただろう? だったらそれまで僕も言う必要はないと思つただ」

真つ直ぐに、真つ直ぐにカミュは俺の目を見て話してる。けれど、そんな風に真つ直ぐに俺の目を見てカミュは嘘をつける。今までに、きつと何度もそうやって嘘を平気で吐かれていたに違いない。それを、俺は、全然気付かずに全部信じて……。どんなにカミュにはラクな、やりやすい人間だっただろう。ただ、もう騙されない。もう信じたりしない。

怒りで鳴りそうな歯列を押し退けて俺は恫喝した。

「納得の行くまで試すって言うのは、白紙の答案を出す事なのかよ?」

初めて、カミュの瞳の中で何かが動いた。

けれど、それは、直ぐに隠され、幾分硬さを増した、けれどしつかりした声が俺の耳に届いた。

「甘く見ていたんだ。学科の方は自分には少々の知識があるって。だから実技の練習に殆どの時間を割いてしまつて学科を疎かにした。その結果だよ」

また、嘘だ。

カミュが、半分プロみたいな活動もしていた合唱団の中で育つて、ポールと対等に音楽の話をしているカミュが、たった二問の問題を解いただけでそれ以上の回答が見つけられなかったなんて、一体どうやって信じればいいんだ……うそれとも俺はそう言えば丸めこめると思われてるのか?

「筆記は、前半は楽典で最初の三問は音楽用語、次の二問が記譜法で、その次の二問が音程の概念、次が和音の概念、次が和声二問とその次が対位法だ。ここまでで十問で一体最初の二問以外全部分らなかつたなんて、本気でそう言い張るのかよ……?!」

睨む。ただカミュの目を睨む。カミュも俺も瞬きもしない。

「何度も、連絡が欲しいって電話した……!」

切なくて、胸が痛くて、嘔くような声になった。

「連絡が欲しいって聞いたよ。だから、絵葉書を送つたじゃないか。」

「ふざけるなよッツ!!!!」

「ミロツ!!!!」

リアの大声が俺の怒号に重なった。

俺が、カミュの胸倉を掴んで、吹き飛ばしたからだ。カミュがベッドの上に崩れたのは、偶然の幸いだ。カミュが座っていたキヤスター付きの椅子は大きな音を立てて床に倒れ、カラカラとローラーが回っている。

ベッドに仰向けに倒れたカミュの胸倉をもう一度掴もうとして、カミュの手に音を立てて払われた。その手を掴んでもう一方の腕も掴もうとした時、俺の腕をリアの手が物凄い力で引張った。

「放せよッ!!」

「放せるかッ!! お前こそカミュから手を放せ!」

「リアには関係ない!」

「関係ないことあるかッ! 誰の部屋でこんな馬鹿げたことやってると思ってるッ!!」

「だったら、こいつを引きずつて出て行く!!」

「頭冷やせって言ってるんだ!!!」

それから、どのくらいリアと床の上を転げ回るような掴み合いの喧嘩をしたのか、気が付いた時には数人がかりでお互い押さえ込まれていた。

「Fair Wolf 君……君は、新学期そうそう何をやってるんだね……!」

その声で、がっちり俺の肩を押さえ込んでいるのがハウス・

マスターのキャブテン・ベネットだと気付いた。目の前には、肩で息をしながら俺を睨みつけているリアが居て、そのリアはウォルトと最上級生のアーサー・モルガンに両腕を掴まれている。リアの顔には赤く擦傷、唇の端が切れて出血、ワイシャツのボタンは弾けて肩が破れていた。

リアは俺の目からゆっくり視線を外すと、両脇の二人に一言一言言つてふらりと立ち上がった。

「フエアファックス、君も立つて。一緒に来てもらうよ」

背後のキャブテン・ベネットに促されて、床に手をつけて立ち上がるうとしてたら、左肩から指先にかけて電流が走るような刺激が肉の中を貫いた。

うわつと呻いたら直ぐにキャブテン・ベネットが右肩を支え、リアがはつとしてこちらに手を伸ばした。俺は首を振つて痛みをやり過ごしてからリアに言った。

「大丈夫。肩、なんかへんな風に筋を違えただけ。……ごめん。怪我さして……」

「俺は、こんなの舐めときや治るが……でも、お前、左だろ、それ」「エインズワース、大丈夫だ。話を聞く前に医務室に連れていくから。君もその顔のかすり傷と唇が切れているの以外におかしな場所があつたら直ぐに医務室に来たまえ」

キャブテン・ベネットの肩に寄りかかつて方向転換すると、アンソニーやマックス、エドやマイケルにウィリアムまで、みんな顔に驚きと心配を張り付けて凍りついたような表情で俺の事を見ていた。

ハウス・マスターは集まったみんなに部屋に戻るように言つて、リアを捕まえていた最上級生のアーサー・モルガンに後の事を頼んだ。

「エインズワース、今日の所は君から話を聞く時間はなさそうだから自室でゆつくりしたまえ。明日以降、こちらから連絡するよ」

キャブテン・ベネットのリアに掛ける声は明るく、俺はほつとした。

歩き辛い二人三脚で医務室に行くと、メトロンのミセス・ベルリッジに「また貴方なの?!」と呆れた声を上げられた。

痛みが走つた左の腕や手には、指の関節が派手に擦り切れて血が出ているだけで他に外傷はなかった。

「明日の朝、きちんとお医者様に行つてレントゲンを取つてもらわないと確かな事は言えませんよ」

とミセス・ベルリッジは眉をしかめてキャブテン・ベネットに言い、キャブテンは盛大に溜息をついて肩を落とした。

「君は、入学して一週間、救急車で病院に搬送されたな。そして今度は、明日の授業開始日初日に病院に搬送だ。スミス寮の記録を、また君が更新してくれた訳だな。フエアファックス」「そんな記録なんて何の価値もありませんよ」

ヒシリ、とミセス・ベネットがキャブテン・ベネットの言の後を締めくくつた。

医務室に泊まつた翌日、朝の七時には学校を出て、ミセス・

ベネットと病院に行った。朝にはもうなんともなくなっていた肩はレントゲンでも異常はなくて、それより大事だったのは左手の薬指だった。昨日までは無かった痛みと腫れにびつくりしていたら関節に腫が入っているとの事。

報告に行ったミス・エヴァンスには、散々な言葉をバケツ一杯くらいぶっかけられた。その上、丁度その場に居合わせていたオケのコンマス、ムウ・アリスンにも冬の湖に漂う霧より湿って冷たい声で、

「君、確か新人生としてうちのオケに入ってきた時にも腕に怪我をしてシオンに警告されていませんでしたっけ？ 学習する頭がないというのは、見るものに恐怖心すら与える欠陥ですね」と切られた。

ハウス・マスターとのカウンセリングでは、カミュと最初喧嘩していた（といってもカッカしてたのは俺だけだ）ところに、リアが止めに入ってきてくれて、そのリアと喧嘩してあの惨状になった。リアに非は無いと状況を説明して再度キャブテン・ベネットの深い溜息を誘った。

「パーロウが慥料を取り止めた件については私も報告を受けているよ。私も彼が頑張っていたことを良く知っていたから残念に思ったものだが、これは彼の選択だ。彼の性格を考えれば、彼がどんなに考えてその決断を下したものと、私は考える。大変な勇気が要っただろうし、もしかしたら恐れだったかもしれない。それでも、彼は自分で決めて気持ちの整理もつけたんだ。そして新しい一歩を踏み出そうとしている。それを応援し

てやる事も、友人としての大事な役割であり、名譽な事だと思わないかね、フエアファックス」

「後で本人がどんなに後悔をするか分かっていても、友達なら応援するべきなんですか？ それが本人の出した答えなら、友達なら何でも納得してやるべきなんですか？ そんなの、俺の知ってる友達じゃない。少なくともカミュの音楽に対する思いは本物だ。それを先生みたいに色んな理由を付けて、自分を納得させて、全部ほっぽりだしたんだ。もし、本当にそれが正しい決断なら、それをオープンに出来ない理由なんでない」

「それは、フエアファックス、君の考え方であって、パーロウは君ではない。彼には彼の想いがあり、経験があり、人生があるんだ。いい友人関係を築くにはその人物の芯の部分で尊重出来るんではないかね」

「俺は自分が尊重できない何かを、そうするのが礼儀だとか大切だとか言って尊重するふりなんか出来ないし、するつもりも無い。俺は俺が心から大事だと思うものを守るし、どうする事も出来ないくらい尊敬できる人を心から尊敬するんだ」

「フエアファックス……！ それでは人間がお互いに理解しあつて、協力しあつて生きていくのをとても難しくするよ。人は誰でも自分の意見だけを通して生きてはいけななんだ。お互いに譲り合つて、理解と共感しあつて生きていくし、それが社会というものだ」

「理解も共感も、どんなに片方がしようとしたつて相手がそれを許さなきゃ出来るものじゃない。俺は、自分の意見を通して

るわけじゃない。嘘はつかないって言ってるんだ」

三時間以上も押し問答を続けて、頑としてカミュに謝罪と関係の修復を申し込む事を拒否した俺は、反省期間として三週間自由時間の取上と外出禁止、反省室（これはハウス・マスターの宿舎にある個室）での生活、今学期で合計四十時間の奉仕作業を命じられた。

寮に戻ってもポールとの相部屋だ。ハウス・マスターの官舎で決められた時間割で生活するのなんて、かえって好都合なくらいだ。

教室移動の合間にリアに捕まって事の顛末を説明させられた後、俺は実際そう言っただけで締めくくった。

「お前……そりゃ、ものも考え方次第で言うけどな……。それより、指、どうなんだよ？」

「骨折じゃないから大丈夫。楽器も指にテーピング巻いとけば弾けるし」

「……………つたく……………ピピらせんじやねえよ……………」

リアは心から安堵したと、思いつきり息を吐いて、軽く俺の頭を小突いた。

まだ教室の移動になれていない新人生徒が、甲高い声で何かを言い合いながら古い校舎をバタバタと走り回っている。

ふっと、記憶が昔に引き戻された。切れ切れの、写真のような記憶が脳裏に浮かんで消えて、その無軌道な動きはリアの落ち着いた低い声でやっと終わった。

「気付いてるか？ お前、カミュより背、高くなってる。半一

インチぐらいだけだ。それで、腕力とか筋力はお前の方が断然発達してんだ、農場の手伝いとかでき。そのお前が、感情に任せてカミュに手を上げるなよ……。カミュが軋料の事、一言も断りを入れなかったのは、俺もカミュらしくないと思うさ。でも、あいつは話さないし決めたなら絶対口を割らないタイプだし。実際、あの後俺が、お前も悪いんじゃないのかって言っつても口割らなかつたしな」

俺は、ちよつと呆然としてリアを見た。俺が、カミュよりもデカクなってる？

「まあ、俺もあいつの太筋のやり方には共感しちまう方だから、結局カミュの本当の殻の部分は割れないんだよ。多分、それはポールも、ウォルトもアンソニー達も同じだ。問答無用でカミュの懐に切り込んでいけるのは、前にも言っただけど、俺はお前ぐらいだと思ってる」

「……そんなの、買いかぶりだ。俺は、カミュの近くに行けた事なんて、一度も、ない。リアの方がよっぽどカミュの事を良く分ってる。ポールの方がよっぽどカミュの魂みたいな部分に近い。ウォルトの方がよっぽどカミュと話が合う」

視線を落とすと、乾いた石畳の上を、小さな蟻が餌を啜えてせかせかと細い糸くずみたいな足を動かしていた。

「顔を上げろよ！　うちの馬鹿兎が言っつたぜ？　不安な時に顔を伏せるな。そんな時こそ顔を上げて周りの人間に笑って見せろって。そうすれば、その不安に打ち勝てる自分は、自分の周りにいる人間がそういう風に育ててくれるって。とにかく

な、カミュはもうお前の面倒見のいい兄貴をするガタイでもお前のナニでもないんだ。お前と同じ、いや、お前より三ヶ月弟なんだぜ？ そこんとこ、頭冷やしてもう一度よく考えろよ。俺が言えるのはそれぐらいだ。とつととポールと同室がイヤだなんて言つてないで寮に帰ってきたほうがいいと思うけどな」

リアは、組んでいた腕を外すと「じゃあな」と腕を振つて午後のスポーツの授業を受けるためにグラウンドの方へ駆けて行った。

俺は音楽棟に向かつて歩きながら、もう一度リアに言われた事を頭の中で繰り返し見返して見た。

俺がカミュよりデカクなつていて、その自分がカミュに対して力押しで自分の感情をぶつけた事。

カミュより三ヶ月も早く生まれてる事。

今までカミュが色んな場面で俺の為に骨を折つてくれた事。テーブルにばら撒かれたトランプのカードみたいに、頭の中に小さな映像が散らばっているのが見えた。

カミュが俺に嘘を付いた事は、今も許せない。でも、同時に、俺にもカミュに謝らないといけない事や感謝しなきゃならない事がある。

眠い目を擦りながら夜中の話に付き合ってくれたカミュ。俺が何かで失敗したら、本気で心配してくれたり注意してくれた。ダンス大会では、俺がゴネタからカミュが俺の変わりに女装をした。

俺は、芝生の上にはやがみこんだ。

俺は、間違つてない。けれど、百パーセント正しい訳でもない。夏に見た、朝霧を射して真っ直ぐに金色の光。あんな風で居たいと思つてから、二ヶ月も経つていないのに……。

結局、その晩俺はハウス・マスターのキャプテン・ベネットに自分の言葉の撤回を申し出た。カミュにきちんと謝りたいと思つている事、反省している事、もう二度と暴力沙汰は起こさない事、必死で説得して、その週の終わりにやつと寮に戻してもらえた。

久しぶりに顔を出した食堂で、ハウやマックス達に「出所」と散々からかわれながら夕食を済ませ、部屋に戻った。部屋にはもうポールが居て、でもヘッドホンで何かを聞いていたからそのまま静かに、自分の机の前に行つてやれやと溜息をついてネクタイを外した。

「もう戻つて来たんだ？ いい気なもんだね。無抵抗の人間に暴力を振つておいて。ルーファスはお前のせいで専科に行くのを諦めたのに」

ぎよつとして振り向いた。

ヘッドホンを外したポールが冷たい目で俺を見ていた。

「おい、今の何だよ？ カミュが俺のせいで諦めたつて……！」

ポールは瞳をすつと細めた。凍りついた暗く薄い青の中に、一瞬光が反射した。

「自分で考えれば？ 僕はそう思うという事を言っただけだ。それから、お前がこの部屋で寛ぐんなら僕は消灯まで図書室で勉強する。でも週末には僕ものんびりしたいから、十曜と日曜、

部屋の所有権は交互にしよう」

ポールは恐ろしく低い温度の視線と声のまま最後の一瞥を俺にくれると、ふいつと部屋を出て行った。

その温度の正体が軽蔑だと気付いたのは、ポールの姿が消えてからたつぷり一分は経つた後だった。

「何が所有権だ！ 共同で寝起きする部屋だつて最初から決まってるじゃないか!!」

「うるさいなあ。突然喚かないでよ。そんなの本人にそう直接言えばいいじゃん。遅いよ、ミロも。反応が」

「本当にねえ。日常の殆どを眷属反射で生きているから、いざそういう交渉事になると思考回路が錆付いていて使え物にならないですよ」

「なんなんだよ！ 二人揃って!!」

「ミロ、そこ、写し間違ってる」

「おやまあ。専科の人間が、まともに楽譜を写す事も出来ないんですかね」

十曜日、自由時間の取り上げで一週間参加できなかった交響楽団に復帰すると、俺は直ぐにジョシユアに声をかけて楽譜を見せてもらった。今まで欠席していた間に加えられた指示や注意を自分の楽譜に書き込む為だ。

ジョシユアの楽譜への書き込みの文字は、活字のようにかつきりとしていて逆に見落としそうで面倒だ。

人が必死で練習開始前にその作業を済ませようとしているの

に、背後には自分の楽譜を片手に悠然と立つコンマスのムウがいて、ファーストのトップからセカンドのトップへの注文を、これまで細かく入れてくる。

そんな一変に全部書き込めるか！ と苛立っているうちに、昨日の晩のポールの事が頭に蘇って、「こういう事があつた」と二人に言つたら先の反応だ。

ムウとジョシユア、なんだか仲良くないか？ 思ったことを口にしたら、これまた二人揃って、

「そりや貴方、私はちゃんと言つたでしょう？ 馬鹿は嫌いだと。彼の全人格は存じ上げませんが、交響楽団を運営する上で最も愚かな行動を繰り返しているのは間違いないミロ、貴方ですよ。という事は、この楽団の中で私は貴方が一番嫌いなんです。それに比べれば、彼は将来のコンマスとしては溜息が付くほど完璧ですよ」

「自覚が足りないんだよ。そんな指に怪我なんかまでしてき。この一週間、セカンドのトップはミロの学年が交代でやつたんだ。そんなの下に付く人間にとつては迷惑以外のなんでもないし、誰でも彼でもあんたみたいに無神経な心臓持っていないんだ。間違えるたびに「しまったとか」ピクつくトップなんて目障りだよ」

まるで俺が間違つても気にしないで弾いている、とジョシユアに言われたような気がして、俺はびつくりして言った。

「待てよ！ 俺、間違つてなんて弾いてないぜ?」

「だからさ……それが無神経だつて言うんだよ」

ジョシユアがふて腐れて溜息を吐いた。後ろではムウまでこれ見よがしの大きな息を吐いている。

「それで、貴方その指は大丈夫なんですか？」

「ああ、うん。薬指で弾く音は小指と中指使つて弾いてるから授業ではそれで平気だったし」

「……それはまた、アクロバティックな事を……」

ムウはもう一度溜息を吐いて総髯を捲り、ジョシユアも息を吐き捨ててから次に指示を書き加えた箇所を指で示した。

やがてバラバラと人が集まり始め、セカンド・ヴァイオリンのメンバーから（特に同学年）手荒い欲待を受けた。三週間の自由時間の取り上げを言い渡された時、それでも構わないと思つた自分がとても無責任だったと、今更思い知れて一人猛反省した。カミユへの怒りばかり見えて、すっかりこのオケのみんなの事を忘れていたんだ。

こんなんじゃないムウに歴代最低のコンマス候補と蔑視されても、ジョシユアに迷惑扱いされても仕方ない。

自分の事はかり考えるな、というのは、考えられない状態にならないようセンサーを働かせてなきゃいけないって事なんだ。いつも目の前にある事に集中して、それを解決していけばいいという事じゃないんだ。

全体の中で自分の立ち位置を考える。責任を考える。それが出来なければ、子供扱いされても仕方がない。いや、本当の子供ではないんだから、それよりずっと性質が悪い。そういう事だ。

溜息を吐いた。

そうしたら、そうやって何度も溜息を吐きながら、今俺が感じたような事を囁んで含ませるように、何とか俺に伝えようとしてくれていたカミユの心配そうな顔が、さつと頭の奥に浮かんで消えた。

あ。

何かが分つたような気がして、でも、あつけなく消えてしまつたその感覚に呆然としていると、隣に座つていたジョシユアが席を立つた。

「じゃあ、僕自分の席に戻るよ」

「あ、ああ。楽譜、見せてくれてありがとな」

ジョシユアの体の割りにデカくてしつかりした手が、開いていた楽譜を閉じて譜面台から持ち上げた。そして、体の向きを変えて歩き始めようとしたジョシユアは何故だかこちらに背を向けたままびたりと止まつた。ジョシユアの声が届いた。

「上手くなるって言うのは、ミスが減るって事だよ？ 上手くなればミスはしなくて当たり前。だから必死で練習する。その状態をキープするために。けれど、それでもミスしてしまう時が、いつかはある。だから、今度はその時に顔色を変えない強さを身に付けていく。けれどミロは、平気でミスはしないって言う。それで、例えしたつて気にしないんだ。それは、本当にミスなんてしない自分の音楽を知ってるからだ。それが出来るってナチュラルに知ってる。だからミロの音楽は外的要因では絶対に傷付かない……。僕は、それが、分つたから、だから、

専科に來たらしいって言ったんだ。でも、プロの世界にだってそんなナチュラルさは本当は凄く稀なんだ」

ジョシユアの肩が、少し、力が抜けたように下がった。「だからミロは無神経だつて言うのに、ミロはそれも理解らないんだよね……」

確かに、俺はジョシユアの言ってる事がよく分らなくて、それで結局何も言えなかつた。そして、ジョシユアの方も俺からの返事なんか気にしていなかつたんだろう。さつさと四アルト目の席に座つて第五学年のロジャー・バルバースを威圧しかかつていた。

馬鹿に、考え無しに、無責任に、無神経に、子供。自分に対する評価がこれだけ揃えは流石に凹む。

これからは、もう少し考えて、頑張つて頭よくして、無神経とか言われぬように責任感を持つて生きていくんだ。そう決意を改にして練習に挑んだ。

中休みと練習終了後、後ろから聞こえてきた間違つた音と突然聞こえなくなつた音の主運にそれぞれ次回までの課題箇所指示して、使つた椅子や譜面を片付けてからカミュの姿を楽器倉庫の出口の所で捕まえた。

チラチラと飛んでくる視線があつたり、ウォルトやマックス達がり気無さを装つて少し離れた所で立ち話を始めたりしてこつちに聞き耳を立てているのは分つていたけれど、そういうのはみんな意識から外して、カミュの目を真っ直ぐに見て「Sorry」と言つた。

カミュは、ちよつと視線を周囲に向けて「何が？」と聞き返してきた。

俺は、短く「手を上げた事」と言つた。

そうしたら、カミュはびくつと左端の唇を上げて一瞬可笑しそうに笑つた。そして直ぐに「それはいいよ」と普通の顔に戻つて言う。

「うちは男三人兄弟だし、取つ組み合いの喧嘩なんて珍しいことじゃない」

カミュの、そのあんまりにも普通な、いわゆる「柔和な」つて感じの顔に、俺は少し、息が詰まつた。何が、こんなにカミュから遠いのか。俺にはカミュの心が見えなくて、カミュにも俺の気持ちなんか分らない。その事実が、物凄く悔しくて情けない。

俺は、ゆつくりと息を吐いてカミュの目から視線を外した。

「でも、カミュが黙つて、嘘をついた事には、まだ怒つてる」

静かな声だつたと思う。怒つてるつて言つたけれど、ちつとも怒つていような声には聞こえなかつただろう。

今度はカミュが、ふうつと息を吐いた。

「それについては前にも言つた通り、まだ合否の結果が分つていない状況で言うのもどうかと思つたんだよ」

それだけ言うとカミュの声は聞こえなくなつた。そして、俺が尚も黙つていると、また小さいため息をついて「先に帰るよ?」と言つてウォルト達と寮に帰つた。

ああ、これで終わりだ。そう思つた。

カミュはどう聞いたって本当の事なんて話してくれない。もしかししたら、二度も聞いたさっきの理由が「本当」の理由なのかもしれない。

俺が納得できるかどうかの理由じゃなくて、それがカミュの理由なのかもしれない。

お前が言ったこと、全然あてにならないじゃないか……。リアが言った「お前なら」って言葉を思い出して、胸の中でリアにぼやいた。

新学期も二週間目に突入して、専科でのカリキュラムも固まった。個人教官は、これまたどうしようも無い事にミズ・エヴァンスに決まって、思わず盛大に本人を目の前にして溜め息を吐いたら分厚いスコアでぶん殴られた。ミズ曰く、自分が一番若くて体力があるヴァイオリンの教官ということで問題児の俺を押し付けられたのだから、自分こそが教室中の空気を使い果たして盛大な溜め息をつきたいのであって、俺が自分の目の前で溜め息なんてものを吐くな、という事だった。そして、教官の差し替えを希望しても俺を引き取ってくれる教官は居ない、ともトドメを刺された。

エチュード、課題曲と宿題の量はこれまで選択芸術の授業で出されていたものなんて比べ物にならないくらい量が出されるし、何よりも驚いたのがその締切りの速さだ。選択授業の時は、一ヶ月や二ヶ月、時にはその学年一年間を使ってじっくりと完成させていくようなスタイルだったのに、平気で一週間以

内で点数をつけると言われたりする。

これまで交響楽団のサガはもちろん、シユラや音のトニー・マクファーレンなんかは専科顔負けの演奏をする、と言われるのを聞いてきて、自分もその通りだと思つてきたけれど、これは、違うんじゃないか、と思うようになった。

シユラやサガ達は、自分達の弾きたい曲をじっくりと時間をかけてそれぞれの目指す理想の高みに磨き上げていく。けれど、専科の連中は凄まじくタイトに絞られた時間制限の中で一定以上のラインに到達する事を求められる。

その作業はとも目まぐるしくて、本当にこんな弾き方ではないのか、自分の立ち位置が見えなくなりそんなスピードだった。個人の学科の他に、もちろん授業オケもあつて、これで午後に交響楽団があつた日には本当に朝から晩まで音楽一色だった。

今年からクイーンズベリに赴任した授業オケの弦のトレーナーでアンリ・アミという人が居る。結構気さくな感じで、音楽家、というよりは普通にブレップとかの先生みたいな感じの人だ。CNSMDP、つまりフランス国立高専音楽院で音楽教育を専攻して卒業してイートンに二年居てクイーンズベリに来た、と紹介されていた。

そのアンリが、何回目かの授業オケの後、肩をポンと叩いて話しかけてきた。

「やあ、指、治ったのかい？」

そういえば今日からテーピングを外していた。良く見てるな、

と思つてアンリの顔を見ると、更に驚く事を言つてきた。

「疲れてるように見えるけど、大丈夫？ 君は今年からこの学校の専科に移つて来たんだよね。もともとはこの学校の普通科の生徒だから全く新しい環境になつたわけじゃないと思うけれど、どう？ やつぱり大分環境が違ふかな？」

二回はパチパチと目蓋を開け閉めした。アンリは黙つてやさしい目で俺が何か喋るのを待つていて、俺はとにかく何か言わなくちゃという気持ちにさせられた。

「えつと……授業が速い、というか……もつと練習すればもつとちゃんと弾けるように直ぐに違ふ曲を渡されて、いつも中途半端つていうか……」

あはははは、というめちやくちや明るい笑い声がガランとしたステージに響いた。

「君は、欲張りだなあ……。僕はつつきり、友だちが出来なくて寂しいんじゃないかと思つただけど。いや、そういう事ならちやんとした答えがあるよ」

アンリは横にあつた椅子を引つ張つて俺の隣に腰掛けると、丁寧に説明してくれた。

「いいかい？ 演奏家にもつとも重要な事は、弾ける」つて事だ。時折半端もいらない子供の演奏家が神童として持てはやされるのは、その少ない人生の時間の中で既にあるレベルの曲を「演奏」出来るからだ。それはつまり肉体のハンディや、時間のハンディを凌駕しているから人は驚嘆する」

ここまで、分かるかい？ とアンリの瞳はイタズラをしたく

てうずうずしている子供のように光つた。

「じゃあ、天才ではなくて、普通の人に、五十年とか百年とか時間を与えて、たつた一つの曲を練習させたら、どうなると思うう？」

「そりや、弾けるようになる、んじゃないのか？」

「その通り。毎日十分でもいい。ひたすら百年やればいつかは必ず弾けるようになる。けれど、問題は、じゃあその普通の人が、プロの音楽家としてやつていけるかつて事だ。どんな人間だつて無限の時間と反復があれば、僕は演奏家になれると信じてる。けれど、それではプロとしてはやつていけない。そうだろう？ 一曲マスターするのに百年とか掛かつていたら、聞きに来てくれる人がみんな死んでしまふよ。まあ、これは極端な例だけれどね」

アンリはにつこりとまた笑顔を作ると続けた。

「プロのパフォーマンスを育てるつて事は、つまり一つの曲を短期間で「弾ける」よきになる人間を育てるつて事なんだ。これは、水泳やテニスや乗馬と同じように体で覚えていく事なんだよ。まずは、正しい音が出せるようになる。指が、肩が、手が音と体の関連性を覚えてピタリとはまるようになる。泳ぐ時に次は右手を上げて、足を何回バタバタさせて、と思わなくとも泳いでいくように。目の前にやつてくるボールをラケットを何センチ前に出してそれを三フィート左に飛ばしたいから上腕筋に力を入れて手首を曲げて、なんていちいち考えないで、えいつとやつるように」

スイスイと泳ぐ真似や、テニスのラケットを振る真似までしてアンリは話し続ける。

「で、音楽家の場合には決められた時間の中で、とにかく弾けるようになる訓練をしていく事を次に始めるんだよ。最初は一週間と言われても、そもそも一週間の時間が計れない。それは何百時間もの時間の塊だけれど、それをどれくらいという風に使ったらどういふ結果が待っているのか、そういう事が分からない。だから、それを体で覚えていく。それから、もう一つ。これが大事なんだけど、オリンピックでもコンクールでも分かるように、とにかくある程度年齢が幼い方が身体能力といものが爆発的なんだよ。成長しきってしまった大人には出来なくても子供はこなしてしまし、鍛えれば鍛えるほど実際伸びていくんだ。個人差はあっても、若年齢の優位さは殆ど黄金則と言っている。

だから、この限られた柔軟で強靱なスポンジのような肉体を持つ期間に、我々教師というものはまず数をこなす事を目標にさせるんだ。百の曲を弾けた腕は、三百の曲を弾いた腕よりも足りない。三百の曲を弾いた指も千の曲を弾いた指には適わない。あらゆる経験を積んで、その蓄積の中から自分にとっての特別を研鑽していく。これが大学での仕事だ。数がね、ものを言うんだよ。じつくり自分の好きな曲を弾くのは、二年後まで楽しみにとっておいで。今は、武者修行のつもりで千でも二千でも方でも沢山の曲を弾いてごらん。出来のよしあしは、ちゃんと教師が見るし、アドバイスもする。その為に僕らがいるん

だから」

同じような事を、ずっと以前、カミュにから言われたような気がした。

あの時の自分は、カミュが専科に行ってしまうかもしれないって思ってた焦っていて、自分が行ける可能性を計算していて、そんな時、カミュが、俺は指が動くから可能性ならあるんじゃないのかって言った。その時俺は、指が動くよりも大事な事があるんじゃないのかって反発したけれど……。

あの時言ってくれたカミュの言葉の意味と重さが、今頃になつてちゃんと分かる。

カミュは、いつも俺より何歩も先を見てモノを言っていた。そして、いつも俺はそれを分らないで、焦れたり怒ったり……。

カミュに謝つても怒つても言つた日から、カミュの態度はいたって普通だ。

俺に怒つてるわけでも、避けてるわけでもない。普通に、本当に普通の友だちの一人として接してくれる。

でも、その普通つて言うのは、これまでがどんなに特別だったか痛いくらい分かる普通さで、カミュに嫌われるのと同じくらい辛い結果だった。

交響楽団の帰り、以前なら必ず待つていてくれて寮まで一緒に帰っていたのに、今はカミュはタイミングのあった人間と一緒に雑談しながら帰っていく。

夕食や朝食は、同じ部屋だったからなのか、必ず一緒だった。

一緒なだけじゃなく、いつも俺が食べ終わるまで紅茶や珈琲を飲みながら待っていてくれた。

何かと話しかけてきてくれたし、一緒によく笑ったし、呆れた表情や、びつくりした顔、とびきり優しい笑顔、いろんな顔を見せてくれたけれど、今は普通に「やあ」って挨拶して、話す必要がある時はニュートラルな笑顔で喋る。

「最近、カミュと一緒に帰らないね」

「ついこないだの練習の時にも、ビオラのアンソニーに後ろから追いつかれてそう話しかけられた。」

「俺が、まだ怒ってるって言ったからじゃないか？」

「つい声を尖らせて答えると、アンソニーはそうかなあ、と首を捻った。」

「カミュ、そんなの全然気にしてないし、してたらもつときっぱりした態度を取ると思うけどね。僕らから見たら、なんかやつとカミュもミロの世話焼きモードから卒業したか、って感じだけど……」

俺は思わず立ち止まってアンソニーを見た。アンソニーもびつくりしたような顔をして俺を見返した。そして、ちつよとしまったという顔をして髪を弄ってから、「ミロ、本当に気付いてなかったの？ そりや、酷いよ……」と困りきった声を出した。

「いくら同じ部屋だからってさ、食事のバランスまで心配して肉を残すとか、牛乳だけでお腹を一杯にするとか言ってお皿の上に料理盛ったりしないよ。いや、そりやみんなミロの偏

食からかって食べるとかぎやーぎやー騒いだけど、それって結局はからかって遊んでただけだろ？ カミュ、ミロの事になると顔色変わるくらい心配してたし、自分の時間をどんなに削ってもミロの話とか持ちかけてくる事には乗ってたじゃないか？ ああ、このままミロの世話焼きのに必死になってたらカミュの方が潰れちゃうよって、ウオルトやリアもちよつと心配してたんだ。したら、今年からミロは専科に行つて、しつかり自分の将来も決まって自分なりに頑張ってるだろう？ だから、カミュも自然とミロの面倒をみなぎやつていう使命感みたいなものから開放されたのかなって……。

彼、もともと社交家だから大勢と満遍なく仲良くするのがうまいだろ？ それなのに、ミロだけは特別だから、目立ってたんだけど……。なんか、ミロにその自覚が無いと、カミュの面倒見の良さも報われたんだか報われななんだかって気が、ね」しちゃうんだけど……と口の中でもごもごと言葉を続けてアンソニーは苦笑した。

俺は、胸が締め付けられて、それが痛くて、アンソニーの顔を見つめ続けるしか出来なかった。それが、とてもびつくりした顔に見えたんだろう。アンソニーに「ま、きつと二人とも大人になったって事なんだよ」なんて慰められる始末で……。

その後は、寮までの道、アンソニーはそれつきりその話はせぜに専科の授業について色々聞かれて、俺が聞かれた事に心半分って感じで答えて終いになった。

その日、消灯までの時間、初めてホールが部屋に戻ってくる

のを「早く」と心から待ちわびた。

消灯五分前、テキストやノートを語めた鞆を肩から提げてポールやつと戻ってきた。一言も無く、ポールは荷物を机の上に置くとさっと着替えを始めた。

タイムリングは読めなかった。けれど、ポールが寝台に入ったらチャンスは無くなるというのははつきり分かったから、俺は慌てて声を掛けた。

「ポール、」

ちよつと目を見張ったポールが振り返った。

「カミュが俺のせいで専科に行くの諦めたって言うのは……カミュが、俺の面倒見るのに参って、それで、俺と別の道を選んだって事か？ 俺が、専科に来なければ、俺が普通科に残って居ればカミュは専科に来る道を選んだって事なのか？」

長い沈黙の後、ポールの瞳は暗く疲れた色を滲ませた。そして、俺に対する嫌悪の感情無しに言った。

「ルーファスが自分で止めたんだ。そして、あそこで止められるなら、やつぱりルーファスは音楽家には向いてないって事だ。

……電気、消すよ」

パチン、と乾いた音がして、部屋の中が真っ暗になった。そして、ポールの寝台周りのカーテンがシャット閉ざされた。

俺は、動けなくて、決断が下せないでただじつと椅子に座っていた。今自分が握っているこの交換条件が、カミュが専科にくる事に繋がるのかどうか、見極められなくて、じつとしていた。

最初は、カミュと一緒に来たかった。そして、音楽家になりたいと思つた。カミュと、ロスとサガのような特別になれなくても、一緒に音楽をやれたらいいと思つた。カミュに音楽で認めて貰えたらいいと。

でも、最初からカミュが俺と距離をおきたいって思つていたのなら、お互いのポジションが変わつたつてもいい筈だ。俺が普通科の学生になつて、カミュが専科の学生になる。

カミュは、自分の事で忙しくて俺の面倒なんて見る時間も、見ようともう思わないだろうし。

心臓の鼓動が徐々に早くなつた。明日、カミュに話を。先生にも聞いてみよう。まだ間に合う筈だ。音楽家になるのを諦めたくないともかく自分の胸の奥の声は、我儕だ。

明日、朝になつたら直ぐに……。

「プロになるつていうのは、」

突然、暗闇にポールの声が出た。あまりに急に、驚いて飛び上がりそうになつた。

「プロになるつていうのは」

ポールの声が全く同じ台詞を二度繰り返した。俺の心臓は、血管を破つてしまふくらい痛く、強く血を体に送り出し始めた。「誰かがなるからとか、誰かがならないからとかで決めてやっていけるような甘いもんじゃやない。結局、どうしてもそれで生きていくつて自分かと思えなければ、遅かれ早かれ挫折していくんだ。だから、お前が普通科に戻つて、ルーファスが専科に来たとしても、ルーファスの音楽は趣味で終わると思うけどね。

お前にルーファスの事を理解なんて出来ないんだよ。ルーファスは、お前の何万倍も繊細なんだ。だから、これ以上余計なちよっかいをだしてルーファスを振り回すな」

俺の考えが見透かされた怖さ。そして、それ以上に、覆い被さって来たボールの言葉の重み。これまで受けてきたボールの言葉のどれよりも冷たく真実の重みがあった。分かつてる。

俺だつて考えた。カミュが専科に行くから自分も行かなくて、そんな甘い考えが通る訳がないって。

俺にだつて分かる事、カミュなら考えるまでもないだろう。誰かが行くからとか、行かないとかじゃない。自分がそこで生きたいと思うかどうか。

カミュは迷つてたつて言った。自分は本当にプロの道を目指すのかどうか。考えて判断したつて言った。それが白紙解答の理由だと言つた。

でも、だったらあの実技試験のシャコンヌはどうなる？

あの圧倒的な世界を見せつけたピアノはどうなる？

実技は筆記の後だった。白紙解答で自分の決意を結んだのなら、何故実技試験をキャンセルしなかった？

どうして、わざわざ俺に聞きに来てくれなんて言つたんだ？そして、結局カミュは専科に行く事を止めると、自分の口からは俺に言わなかつたんだ。

考えれば考える程訳が分からなくなる。

もし、俺の面倒見るのに疲れたつて言うんなら、ボールと一

緒に転科試験を頑張つて、俺をけしかけられるような真似なんてしなきゃ良かったんだ。

どうして、俺を巻き込んだんだ……？

出口の無い迷路だ。疑問だらけの脳みその中で、カミュがシャコンヌを弾く姿だけがはつきりと輝いている――。

パンッ、と肩を叩かれて、過去に戻つた意識が現実に戻つた。アンリがニコニコと俺を見ている。

「何はともあれ、友だちと遊ぶ時間を確保するのも大変だと思うけど、週末の一日くらい気持ちを入れ替えて、普通科のこれまでの友だちと街にでも行つて羽を伸ばすのも音楽にはいい葉だよ！」

それをしたい一番の相手を捕まえようとして、俺の日常は漂流の一步手前だよ、とは言えなくて、アンリには言葉では「ありがとう」と返して、俺は音楽棟を出た。

今年の新入生獲得にも色々と揉めなければ、三週間後にはなんとかどのパートにも満足出来る人員が揃つた。ヴァイオリンには双子の兄弟が入つて、その二人が今から将来のコンマスは自分になると言つて譲らないのが面白い。二人とも経験者だと言つていたけれど、クイーンズベリに入る前の夏休みに一ヶ月の体験レッスンを受講しただけ、という感じだから、今のところコンマス候補に関しては白紙状態だ。ただ、二人ともやる気満々だから、お互いに切磋琢磨しあつていい具合に育つていけばいいなと思う。

ピオラは、定員割れで、パート・リーダーのテオドル・シエパーズ以下アンソニーなんかが真つ青になつて居るけれど、定員より三名ほど多いヴァイオリンからそのうち移動希望がでるんじゃないかと俺は思つてる。

コントラバスにも二人、一人はプレップでも弾いていたつていうから、マイケルとマーチンは胸を撫で下ろしていた。ちなみに、今学期のコントラバスのトップはマーチン、最終学年ではマイケルがやると二人はジャンケンで決めて居る。

パーカッションにも一人。トランペットをやつた事があるけれどドラマの方が格好いいからと入つてきた。

それから、少し驚いたのが、今年の新入生に専科の掛け持ちでやりたいと二人の希望者が来た事だ。一人はヴァイオラ、もう一人は声楽からだ。二人とも、専科と掛け持ちしている先輩が居るつて聞いたから、と言つていたので、ジョシユアはまさに「パイオニアだなと肩を叩いたら、「自分だつてそうだつて自覚あるの?」と睨まれたけれど、顔が赤くなつていたのでまんざらじゃなかつたんだろ。」

新人生歓迎会も、例年通り爆笑あり野次ありの賑やかなものだった。まだふとアイオロスの飄々とした長身やサガの優しい眼差し、シユラのきつい視線やアンドリユーののんびりした辛口のコメントを期待してしまつたりするけれど、それでも少しずつ、この新しい空間に慣れてきている事も確かだ。そして、今年一番に野次を貰つたのは、なんとうちのヴァイオリンだった。シオンやサガが居た時代には考えられない事態だ。

「それでは、まだ少し持ち時間があるので来期のコンマスにも貢獻して頂きましょう。ミロ・フェアファックス」

エルガーの甘い「愛の挨拶」を弾き終わったムウ・アリスンが、突然俺を指名して、俺は椅子の上で飛び上がった。そんな話は何も無かつたのに、しれつとした顔で「時間が勿体無い。早く舞台上に上がりなさい」と急がす。指笛や、足を打ち鳴らす音が無責任に沸き上がつて、何も考えられない。

おまけに司会の第五学年トロンボーンのジョン・ウィリアムズが「皆さん、ヴァイオリン専科生の未来のコンマスです。拝聴! 拝聴!!」なんて煽りを入れるから、頭が完全に真つ白になった。

必死に、何かヴァイオリンの曲、と頭の中を探して、やつと見つけた音を出す。

場内は、シンと静まりかえつた。曲は一分にも満たない短いもので、焦つた俺は口を動かした。

「えつ、と、あの、これはグラナダTV製作の「シャロロック・ホームズ」シリーズのベースシククなオーブニングの曲で……。オーブニングやエンディングは話の内容に合わせて編曲されていて、例えば、ホームズがライオンパツハの滝に落ちてしまふ「最後の事件」のエンディングは(♪♪♪)こんな感じに重苦しくて、でも二人が再会する「空屋事件」では(♪♪♪)こんな感じに華やかになつてて……」

三曲弾き終わった時、やつと管の方からじよじよにリアクシオンが返つてきた。「他には!」とか言われたので「ギリシヤ

「語訳」とかはマンドリンでこんな感じ、「青い紅玉」ではちよとクリスマスマスの合の手が入って、と紹介していったら、最後にはチェロも大笑いしていたのでホツとた。これで自分の演奏はお仕舞い、とヴァイオリン・パートに戻ろうとしたら……ムウ・アリスンが鬼の形相で俺を睨みつけ、ペンやサイモン、ハリも顔面蒼白になっている。

下級生は……と思つて恐る恐る首をめぐらせると、みんな口をポカンと開けていて、特にジョシユアは魂が何処かに飛んでいつてしまったうな、蠅人形みたいになつてた。

たった一人、今年の新入生、ファイリッブ・アネットだけが目をギンギンに輝かせて熱い視線を送つてくれていたから、「これ、知つてる？」と聞いてみた。

「知つてる！ つか絶対自分でも弾いてやると思つて、それでヴァイオリンを選んだんですっ！」

つて、興奮した返事が返つてきて、あんまり嬉しかったから、「じゃあ、いつか一緒に弾こうよ！ これ、本当は合奏だから！」と誘う。

すると、

「フエ、ア、ポツ、クス……!!!」

と物凄く震えた声で名前を呼ばれて、見たら、ムウが唇を震わせて呪んでいた。

俺は、まだバカ笑いが続いている八角堂の中で、なるべく小さくなつて、大人しく自分の席に戻つた。

「手く、何考えてるんだよ、アンタ！」

新入生歓迎会が終わつた後、小さくなつていた甲斐も無くムウに呼び出され、何故かそこにジョシユアまでくつ付いてきて二人掛りで責められた。

「全……馬鹿だ馬鹿だとは思つていましたが、ここまで底無しに馬鹿だとは思いませんでした。貴方、脳みそつていう人体器官の一つ、ちゃんと持つて生まれてきてますか？」

「いくらだつて、アンタだつたら弾ける曲あるじゃないかっ!! クライスターとかサラサテとか、授業で腐るほど弾いてるくせにつ!!! それに、今やつてるペーターペンだつたら伴奏してやつたのにッ」

「そういう事は、その場で言つてくれよ……。あの時はあれ以外思いつかなかつたんだからさ……」

「これからプロになろうつて人間が、何か一曲弾いてみせろと言われてTVシリーズのオープニングですか？ 情けない」

「……でも……みんな喜んでたし……」

「はつきり言つておきますが、コンマスというのは、笑いをとつていくらのサーカス団の頭ではないのです。鍛錬と解析能力で団員からの尊敬の念を勝ち得る技術者であるのであつて、サービス提供者ではありませんん！」

だつたら事前に一言いっておいてくれよ、という訴えはパシオンと無残に打ち落とされて、問答無用にこんなな恥ずかしい思いをした事は無いとか、ヴァイオリン・パートの尊敬は地に落ちたとか、ポロ糞に言われた上に、これをサガやシオンが知つたらなんというか、と言ひ捨てられてムウは肩を怒らせて俺を

置き去りにした。

多分シオンならととと怒鳴って曲の途中で俺を舞台から引きずり降ろして説教初めて、十一曲も黙って弾かせたりしかつたと思うけど、とは言わないでおいた。

音楽棟のホールではマックスをはじめとする金管連中とマーチンとマイケルのコントラバス組みが待ち構えていて、随分長いお灸だつたけど俺たちは笑わせてもらつた、楽しかつた和小突き回された。

「それにしても、おまえんちってテレビもビデオも無いんだろ？ どうやってあんなの覚えたんだ？ うちの図書館にそんなビデオがあつたっけ？」

と肩を組まれたマックスに聞かれて、胸をチリツと冷たい針に刺された。

「ああ、第三学年の時、カミュの家に泊めてもらつてお兄さんのコレクション見せてもらつたんだ」

冷たい針の正体は、カミュへの解けない疑問だ。それがいつまでも刺さつたまま胸に残つてる。

リアや、マイケルたちとツアーを組んでロンドンのシャーロック・ホームズ博物館に行つたのが、なんて遠い記憶の中に見えるんだろう。あの時一緒に撮つた写真、今も大事なものを入れておく机の引き出しに取つてある。

随分長いこと手に取つていない写真を懐かしく思う。ただの感傷だと、分つてる。

寂しいとか、傷つけられたとか、カミュに対する譜の感傷は、

俺自身も傷つける。けれど、その痛みに負けて、事態の本当の所カミュに感じる違和感の正体を探す事を止めてしまつたら、それは取り返しつかない何かになると頭の隅でじりじりとした声が囁く。

早く、答えを見つけないと……向もかも間に合わなくなる。そういう気がする。何が間に合わなくなるのか、それすら曖昧ではつきりとしれないのだけれど……。

だからと歩いてきた十数人のオケの仲間達は、音楽棟から一本伸びている道の分岐点に到着してそれぞれの寮に向けてはらけて行つた。

その時、それまで黙って集団の一番後ろをついて歩いていたジョシユアが、くいつと顔を上げて口を開いた。

「ミロ、好きな曲を弾くのはその人の勝手だけれど、もう少し真剣に考えた方がいいよ。今年に間に合わないけど、来年にはきつとミロならジュニアのコンクールに出る。プロとしてやってくにはジュニアのうちに賞の一つでも取つて、それから国際コンクールだ。もつと真剣にやらないと、一度遅れたら二度と追いつけなくなる。音楽は、遊びじゃないんだ」

言うだけ言うと、ジョシユアははつと駆け出して行つてしまった。

十月になって、ジョシユアの言つた事が現実になった。

ミズ・エヴァンスの口からはつきりと来年の九月のコンクールを目指して、まず学内選考を勝ち残る必要があると言われ、

再度スケジュールの見直しがされた。

結果、なんとか取れるようにしてもらっていたAレベル用の学科にも影響が出はじめた。

それで、受けられなかった授業が発生した場合はチューターが付く事になった。チューターは本来授業に遅れが出たり、問題を抱えた学生を支援するためにあるシステムなのだけれど、芸術活動で通常のスケジュールを組めない学生にも適用されること。チューターは上級生だったり、専門教科のスペシャリストだったり、ケースによって色々だけれど、対象生徒が授業を受けている担任とも連絡を取り合って補習や進度を見てくれる。

既にプロの舞台俳優として活動しているアンガス・エマソン、アフロもチューター制度を利用している一人で、普通の学生と一緒に机を並べて勉強した日数の方が若干少ないんじゃないかな、と言っていた。

朝の早い時間や、夕方、夜、時には週末、生徒の都合に合わせて時間割が組まれる。宿題の範囲や参考書を使って内容の掘り下げまで一対一でみっちりやる。

つくづくあり難い制度に感謝しつつ、午前の二コマ目にあつた数学を、ヤコブ・コリオリという数子の名誉教授に見てもらった。この人は、七十歳を超えるお爺さん先生で、大学教授をリタイアしてクイーンズベリに来た人だ。今までこの人のクラスの話は聞いた事がないな、と思つたら、今は授業は受け持たず、こうしてチューターとして生徒の面倒をみてくれている

そつだ。

丸眼鏡と、長い真っ白な髭がまるでトールキンに出てくるガングルフのようなだけれど、この教授はとても陽気で数学は楽しい！ という人なので、一緒に勉強できて俺は凄くラッキーだと思つている。

全部の問題を解き終わつて、「ほつ！ よく出来たの」と頭を撫でて褒めてもらつてから、俺は教員官舎からスミス寮に走つて戻つた。帰寮報告を寮長にして、階段を降りて自室に戻ろうとした時、給湯室から出てきたカミュとすれ違った。

俺は、今もカミュにどう接すればいいのか決まらないでぐらぐらしているけれど、カミュはきつと気軽に「Hi」とか挨拶してリアとの部屋に戻るんだろうな、と思つて身構えた。「ミロ、」と呼び止められる。

びっくりして足を止めたなら、「最近、二回連続して数学の授業に出れなかつたみたいだけど、ノート、誰かに借りられている？」と聞かれた。

驚いた。カミュから、こんな事また聞かれるなんて、考えても見なかつた。

「僕は、今日の分の課題は済ませたから、ノート貸さうか？」

「あ、うん。ありがと……」

本当は、今補習を受けてきた所なのに、俺は咄嗟にその事は絶対に言わないと決めて借りたい意思表示をした。

カミュは「ちよつと待つてて」と言つて部屋に戻ると、直ぐにノートを持って出てきて「はい」と手渡してくれた。

俺は、カミユの顔をまともに見れない心境で「ありがと」だけでもう一度言つて大急ぎで部屋に戻つた。

ドアを閉めてから、ドキドキしながら今借りたばかりのノートを開いた。

カミユの、細い、きれいな字が並んでいた。

胸がつまつた。

くっそう……！

なんなんだよ？ 俺と距離を取りたいんじゃないのかよ？

それなのに、なんで自分からまた手を差し出してくるような真似をするんだよ？！

訳が分からない！

目端の利くカミユが、同じクラスの奴が授業を受けられなかったら、気を利かして一声掛けるって言うのはありだ。分かるさ。

でも、それと今の俺とじゃ状況が違うだろう？

カミユが、突き放したんだ。俺を。

それなのに、またこんな真似をしとくる。

「特別」を止めただけで、カミユの「普通」の範疇に入る事からまでは俺を排除する必要は無いってことなのか？

でも、一度「特別」を知つた人間には、「普通」は「普通」じゃない。まるでトドメのだめ押しだ。自分はどう相手の事を「特別」には思っていない。「特別」に嫌いでも、「特別」に好きでもない。その他大勢のなかの一つの存在にしか過ぎない。そう言っているんだ。

「特別」を止めるんなら、失つた感情の分だけの気まずさや、納得出来るだけの理由が欲しい。

そういつたもの全てナシで、白紙の上に日常を続けるなんて、それはあんまり一方的だ。

けれど、カミユにその理不尽さを認めさせるには、カミユが言わない「本当の理由」をカミユ自身に突きつけなきゃだめだ。あんな「まだ合否が分かつていないのに言うのはどうか」と思つた」なんていかにもな言葉を言わせたらダメなんだ。

俺は、カミユのノートを閉じて机の横に置くと、代わりに自分のノートを開いてボールペンを手に取つた。

これまで感じたカミユへの違和感、カミユの転料に向けての一連の行動、一度、全部きちんと洗い出して、俺自身が頭を整理しなくちゃダメだ。俺は額にペンを押し付けて、意識を記憶の中に深く細く潜り込ませた。

新人生強化合宿が済んで、ハロウィンも終わり、誕生日が目の前に迫る。

去年より一年分、俺は賢くなれたんだろうか？ 一年分、成長出来たんだろうか？ ニア・ソーリーから誕生日プレゼントのカードとビスコッティやフルーツケーキが入つた小包が届き、コモンルームで寮のみんなと分けて食べた。一体誰が食べて食べられなかったのか分からないくらいあつと言う間に食料は無くなつた。スミス寮のハウス・マスターや寮母のミセス・ベルリッジ、仲間達からもバースデイ・カードを買つた。その

中にはきちんとカミユからのものもあつて、今度は、ちゃんと妹たちからのイラストと一緒に、大切に引き出しの奥に仕舞つた。

いつか、カミユの秘密を解き明かせる時が来たら、俺とカミユの関係はどうなるんだろう？

また二人で葉書屋に行つたりするのか？ それとも、頑なに隠す事を暴かれれば今度こそカミユと俺は決裂するか？

全く見えない未来だけれど、もしかしたら、これがカミユから貰う最後のバースデー・カードになるかもしれないんだ。「それなら、大事に取っておかないとな」と考えた自分の弱気に、苦笑した。

パタン、と引き出しを閉じた所で声がかかった。

「君、身長どのくらいだっけ？」

振り返ると、アンガス・エマソン、通称アフロディーテと呼ばれるスミス寮の最上級生が立っていた。去年、一昨年とスピーチデイの演劇発表で一緒になっている。父親が有名なシエクスピア俳優で、本人もブレップの頃から舞台に立っている俳優だ。

「アフロイトまであと少しくらいだと思うけど」と答えると、アフロは「ふうん、見た目もう少し大きく見えるな」と呟いてから、来週の日曜日、ちよつとロンドンに出てくる時間ないかと聞いてきた。

「知り合いがスチール・モデルを探しているんだ。条件が丁度君に合うかどうかと思つて」

「モデルって、あの色んな服着たりするやつ？」

俺は、目を丸くして聞いた。

「いや。今回はヘンリー・アジェがコンセプト写真集を出すんでモデルを探しているんだ。服のためのモデルじゃない。直接会つたらわらないと本決まりになるかどうかは分からないけれど、顔合わせの交通費は向こうが負担するし、本決まりになったらちゃんとギャランティーが出るよ」

お金が出ると聞いて、一瞬間の中に買いたいものの名前や絵がぱあーつと浮かんで走つた。いくらくらい貰えるのか、つてぐるぐる考えて、いや、これじゃまるで守銭奴だつて慌てて自分を嗜める。

「振る方が気に入らなきゃどうにもならないし、詳しい事も何にも全部決まった後だからね。私も聞かれても困るのが現状で、どうする？ 会うだけ会つてみる？」

もしかしたら、自分でお金が稼げるかもしれない。さうしたら、上手くいけば今度の演奏会までに新しい弦や、こないだアンリに薦められた松脂とか、クリスマス・プレゼントとか、色々、買えるかもしれない。

雛が孵る前に鶏の卵の数を数えても無駄だつて、知つてはいるけれど……でも、親からお金をもらう以外の方法で自分の力でお金を稼げるかもしれないっていうのは物凄く魅力のある話で、俺は五秒くらい考えてべつこの返事をした。

同じ学校で、同じ寮の、全く知らない人間ではない、アフロが持つて来てくれた話だ。信頼出来る。そう思つた。

約束の日曜日、わざわざ部屋まで呼びに来てくれたアフロと一緒に学校を出てチェリング・クロスに向かった。アフロはカジュアル目のスーツ姿で濃い色のサングラスを掛けていた。雰囲気随分と大人びて、少し近寄り難い感じすら漂っていた。

俺は、一応面接で緊張したりしないようにと一番気に入っている煙った青い地に細かい模様編み込まれたセーターに、学校で着ている白いシャツと、一番色落ちしないジーンズでアフロの後をくっついて歩いた。

カミュとロンドンに着た時も、ちよつとちぐはぐな感じのペアドと感したけれど、今日ほどじゃなかったな、と思つた。

チャリング・クロスに着いた後も、アフロは全然迷わず一直線に歩いて駅のすぐ側にあるホテルに入つて行つた。ヴィクトリアンのテイストが残る古い外観の印象とは違つて、ロビーは明るくて広々としていた。見ると、ロビーのソファーやテーブルに座っているのは居るのは大人ばかりで、考えてみれば当然なんだけど、ちよつと胃がせり上がつてくるような感じがした。この中の誰と話をしても、働かせてもらえらるかどうか決まるんだろう？ 目をアンテナのように緊張させて辺りを見回しているアフロの姿を探せば、彼はリフトのボタンを押していた。

一体、何処に行くんだろう？

二人っきりの箱の中で、十筆みたいに生えてくる不安をぶちぶち切つて捨てていると、リフトは八階で停止した。アフロが

扉を押さえて先に降りるよりに動作で促した。リフトの四角い箱を一步出ると、ズラリと扉が並ぶ廊下に俺は立つ事になって、ホテルの内装に圧倒された。

「こつち」

アフロはさつきと毛足の長い廊下を進んで、ピタリと一つのドアの前で止まると、ノックの音を響かせた。

ホテルの部屋で面接なんて聞いてない。

ヤバイ。

なんか、凄く緊張してきた。

どんどんと走り出す心臓をなんとか宥めようとしている間に、ノックが外される音がして、扉が動いた。アフロの首に女の人の手が回つて、挨拶し合つてる声が聞こえた。それからすぐに、もつと大きく扉が開いて、アフロが誰と話していたのか見えた。

物凄く品のいい感じの、お化粧も髪も何も何もかも隙がないつてくらいに装つてる背の高い人だ。鼻筋が細くて、全体的に物凄く痩せているんだけど、ガリガリつてわけでもない。多分、筋肉がしつかりついているんだ。スポーツをしている人なのかもしれない。

半分固まりつつ、目に入る情報を分析していると、目の前の人が少し笑つて中に入るように言つた。笑つた口元にくつきりと笑い皺が出来て、見た目より年齢が高いのかも知れないと思つた。

ドアを押さえてくれているその女の人の前を通つて、少し狭

いりビングまでの通路を歩くと、薄いカーテンで隠された大きな窓と、壁一面にテントのように張られているスクリーン、天井からぶら下がっている傘みたいな布、林みたいに立っている大きなカメラを乗せた三脚に圧倒された。

「いらつしやい。遠い所から来てくれて有り難う。こちらにどうぞ」

ちよつと高めの明るい声に、嘩然としていた意識が現実に戻された。部屋の隅に移動されたコーヒーターブルセットに、今度是小柄な女の人と、顔の皺だけ見たら初老の、でも目の鋭さや雰囲気では全く年齢を感じさせない男の人が居た。

アフロと一緒に来て来た女の人のリードで、お互いに自己紹介を済ませる。眼光の鋭い人が写真家のヘンリー・アジエ、小さい女の方が彼のフォト・スタジオのマネージャーを担当しているフランシス・アボット。背の高い人の方がエージェントのジュリア・ラング。彼女とアフロの母さんが友人同士で話がめぐりめぐって俺の所にきた、という事らしい。

授業の無い週末に、ロケとスタジオでの撮影がある事。ギランティーは拘束時間ではなくあくまでも一つの仕事単位、もしくは日給で、もし今回の仕事をするようならジュリア・ハンソンのエージェンシーと契約をして報酬の二割はエージェンシーの取り分として入れなければならない、などなど。

流れる水のような説明が終わって、それじゃあテスト撮影をしてみましよう、と言われる。ここにきて初めて部屋の大分を占める機材がそういうものの為なんだと察した。

「じゃ、上の服脱いで」

サラッとあたりまえに、とんでも無い事を言われて俺はギョツとして飛び上がった。

「ちよつ、ちよつと待つて下さい！俺、母さんに見せられないような仕事なら、やる気は無いですから！」

必死の形相で、首を横に振った。お金は欲しかつたけれど、何でもやるつてわけじゃない。アフロなんかはもしかして、プロ意識で出来るのかもしれないけれど、ヌードとかだけは、ダメだ!! 職業に貴賤は無いって言つても、それは、俺のやりたいう事じゃない!

突然、沈黙を破つて、何か弾けるような音がした。視線を音のした方に向けると、アフロが一人掛けのソファの中で体を二つに折つて笑い震えていた。

「……母さんに見せられない仕事つて……!!」

息も絶え絶えに笑い続けているアフロを、俺は呆然として見た。

「アングス・エマーソン！貴方、自分の後輩に一体どんな事を教えたの?」

「……クッククック……!! 教えてない。ナンにも教えてない。面白そうだからナンにも教えなかつた!」

ジュリア・ラングの迫力のある冷たい一瞥など平手く気にせず、アフロは笑い続けた。

「……あの、服はその大きめのセーターを脱いでもらえれば結構ですから。それから、アジエはこれまで主に風景写真でキャ

リアを積んで来た写真家ですが、今回はポートレイトにも挑戦してみようと事で、色々な方に声を掛けています。ヌードなどをコンセプトにした作品ではないので、そちらはご安心して頂いて結構かと……」

スタジオ・マネージャーのフランシス・アポットが、眉を吊り上げているエージェンシーと驚いて固まっている俺や笑い転がっているアフロに視線を配りつつ、柔らかな声と物腰で一冊の大判の写真集を差し出してくれた。

そうか、写真家の名前を聞いて、どんな写真を撮っている人なのか、ちゃんと自分で調べておけば良かったんだ……。

その本を見ていていいから、と言われてセーターを脱いでスクリーンの前に移動した。絨毯にあぐらをかいてヘンリー・アジェとだけ印刷されたハードカバーの表紙をめくり、内表紙の献呈の言葉を読み飛ばしてまたページをめくり、そして、胸を締め付けられた。

白黒の、なんの事はない風景の一部なのに、まるで誰かの記憶の中に大事に保管された絵を見ているように、一つ一つの写真が特別で、綺麗で、目に見えないたくさんさんの情報を語り続けた。

めくっても、めくっても、詰まった胸の息を緩める場所がなく、俺は瞬きもせずに写真に魅入った。

こんな風に、人を圧倒させる方法もあったんだ、と鳥肌が立った。音でも、文字による大量の情報でもなく、たった一枚の絵で、こんなに胸が苦しくなる。

これは、どんなからくりでこんな気持ちにさせられるんだろう？

最後の一枚を捲り終えても、呆然とモノクロの世界に捕われ続けていた俺に、声がかかった。

「立って」

俺は手にしていた本をそつと床に置いて立ち上がった。五フィートくらい先にカメラがあつて、ヘンリー・アジェがカメラを覗き込んでいた。この、白黒写真の数々を撮ったんだ。思わず、その見えない彼の目を探して大きなカメラのレンズを見詰めた。

「好きに動いて」

「え？」

「O不終わった。もういいよ」

「ええっ?!

びくりとも動かなかつた間に「もういい」と言われてびつくり。ヘンリー・アジェは、さつさとカメラの前から去つてジュリアやフランシスの居るコーヒー・テンプルの一角に戻つて行つてしまった。がっかりした。

多分、このバイト、ダメだ。やっぱりそんなに上手い話はないよなあ、ともう一度写真集を拾い上げて写真を覗いていたら、ジュリアと呼ばれた。

慌てて本を片手にみんなが集まっている一角に行くと、契約の話と撮影は天候の都合もあるから、これから週末二日は暫くいつでも動けるように予定を開けておいて欲しいと言われた。

「……え？ 俺、働けるの？」

目を睨開いたら、ジュリアが少し人の悪い笑顔で、最初に俺の写真を見た時から殆ど決まっていたと教えてくれた。

俺の写真って、なんだ？ と思つたら、フランシスが「ヴァイオラの写真よ」とイタズラを白状する女の子みたいな顔で教えてくれた。

その後、契約の話になつて至急保護者と、俺の場合は保護者が遠方なのでロンドン近郊でのガーディアンの子承が欲しいと言われ、俺は一つ計画を立てた。

寮生活では、海外や学校からとても離れた場所に生徒の保護者がいる場合、ガーディアンというものを指定する決まりがある。ホリデーや何かの時はまずこのガーディアンが生徒の面倒を見る。ガーディアンは保護者の友人であったり、親戚だったりするのだけど、学校近隣にそういう人間が見つけれない場合は幹旋システムもあつて、うちはそれを利用して。

クイーンズベリーから二つ隣りにある街に住んでいて、これまで何度もクイーンズベリーの生徒のガーディアンをしたという人物で、その話を聞いて母さんがその人に決めた。プレップの教頭まで務めてリタイアしたというものの印象に良かったんだろう。

でも、俺の印象は最初から最悪だった。クイーンズベリーへ入学する時、ロンドンまで俺を送つて来た母さんと落合い、何度も宜しく頼むと言つた母さんに愛想良く心えておきながら、いざ俺と二人でクイーンズベリーに向かう列車に乗つた途端、母さ

んのイタリア訛りの強い英語や、服の事にまで「伝統的でない」と批判の言葉と冷笑を連発した。そして、俺に向かつては、クイーンズベリーには優秀な教育者ときちんとした階級からの子息が集つてきているのだから、教師の言いつけを良く聞き良い家庭から来た友人とコネクションを作つて、将来はジェントルマンとして恥ずかしく無い職につきなさいと、明にも暗にもたたくさんの侮蔑を含んだ訓告を垂れ、クイーンズベリーに着くまでにお菓子を一つだけ買つてあげようとか、どうしても寂しくなつたら週末にはうちに来るといいと猫なで声で言われた。

俺が、世の中こんな失礼な人間がいるのかと呆れているのを、大人しくて気の弱い子供だと思つたのか色々可愛がるうとして、最初のうちはまめに寮に電話を掛けて来たりしたけれど、救急車で運ばれたり、上級生と喧嘩したりの連絡をうけるたびにその熱も冷めて、最近はず季節のカードが届くくらいになつて

る。このガーディアンに頭を下げてサインを貰うより、いつその事自分で新しいガーディアンを探して見つたらいいんじゃないかって、そう思つた。

寮に戻つた俺は、早速アイオリアを探して今日の出来事を報告した。

「それで、これからちよくちよくロンドンにまで行く事になると思うんだけど、リアのうちに泊めて貰えないかな？ ついでに、リアの母さんにガーディアンを頼めないかな？」

「おいおい！ ちよつと待て、ちよつと待てよ！ 家に泊まり

に来るのは全然構わないさ。今兄貴はオックスフォードでフラット借りてるし。でも、そのモデルの話は、怪しくないか？
いくらアンガス先輩の紹介だっていつても、あつちは演劇界の大御所のご子息だろ？ 扱いが違うだろう？ お前、結局、現場になつたらどんな事しろつて言われるのか分かんねえだろ、それ。それでもし学校にバレたら、下手したら退学だぞ?!

「学校にはちゃんと申請を出すよ。アフロみたいにな。エージェンシーの方からも法に触発するよな労働はさせないつて契約書も貰つて来たし」

「お前、いいから、今日貰つて来た書類、全部貰せー」

リアは、スミス寮のホールに降りて公衆電話の前に行く、すぐに尻ポケットから小銭を出して電話を掛け始めた。

リアが時々書類を読み上げたりしながら、十分以上もの長い話が終わると、今度はリアは事務室に行つて大型の封筒を買いさつさと書類をその中に詰めた。宛名書きを済ませ速達で出してもらふように事務員に頼む。

「一応、親父に本当に怪しい事してない会社かどうか調べてもらつて、インタビューもして、全部それからだ。ガーディアンの方は、別件で母さんはお前んとこの両親が承知するんなら喜んで引き受けるつていつてるが、お前のバイトの件は、ちよつと待つとけよ」

普段は二歳年上の兄への反発感ばかり口にするアイオリアだけれど、こういうやり方つて、殆どロスそのまんまんだと思つ

て笑つたら、「人が心配しているのに呑気に笑うな」つて怒鳴られた。

俺はリアと違つて、全く心配なんてしてなくて、あんな写真を撮る人がこの世界にいるんだつて事に興奮するばかりだつた。学校の図書館に行つてみたら、ちゃんとヘンリー・アジェの写真集が何冊も置いてあつて、改めて凄いやと思つた。

週末、仲のいい友達と羽を伸ばしに街に出る代わりに、俺は一人でロンドンに行つた。ロンドンに行つて、モデルつて仕事は朝から晩までの凄いや肉体労働と暑さ寒さへの忍耐への挑戦だとシミジミ実感しながら、なんとか生まれて初めて自分の手だけでお金を稼いだ。

最初に言われた額より二割り増しだつた金額にびっくりしている、ジュリアが唇の片方だけを綺麗に引き上げて言つた。「アジェが貴方の事気に入つて随分使う写真を増やしたからつて。クリスマスのロンドンの本屋を楽しみにしてなさい」

どれだけたくさんカミュに話したいと思う事が胸の中に溜まつているだろう。

そして、それに比例してカミュに対してのフラストレーションも膨れ上がる。

カミュとは、時々物理や数学のノートを貰してもらつたり、偶然食事の席が一緒になつたり、オケで顔を合ませたり、ただそれだけだ。全部を偶然に頼つてる。

一度リアとジムのクラスが重なつて、バスケットのチームを組

んだ時、

「あいつ、無邪気に笑わなくなつたな。最近少し、精気が無い。まあ、やつぱああれかな、燃え尽き症候群つてやつ」

と、アイオリアは目に映るカミュの最近の変化を口にした。新学期になつてからのカミュの姿は、俺の目には、サガの姿に重なつて見えた。感情に幾つもの扉と鍵を掛けて、自分を靜かに保つていつも優しく笑つてる。

笑つているから、その人が幸せだとは限らない。「笑う」つて言う事は、「怒る」事より頑丈な扉だ。他人に付け入る隙を与えないから。

詮索好きは悪趣味だと思ふ。カミュが本気で隠したいのなら、それを尊重してやる選択肢だつてあるし、それぐらいの弁えだつてある。けれど、本当にカミュが俺からの詮索を避けたかつたのなら、夏期休暇の前に、夏休みの間に、俺に一言直接言えば良かったんだ。「やつぱり止めた」と。

色々考えたけれど、僕は止める。

そう言えば良かったんだ。

言われたら、俺はきつと騒いだだろう。考え直せて喚いだろう。けれど、それが、本当にカミュ自身が何遍も考えた末に出した答えなら、それなら俺は飲み込むしかなかったんだ。

けれど、カミュは俺に知らせなかつた。どうしてカミュは俺に言わなかつたんだ？

時間なら、十分あつた筈だ。

単に言いたく無かつただけ？

でも、いつかはバレる事だ。どうして俺に言いたく無かつた？一緒に頑張ろうと言つておいて止めたから？言ひ辛かつた？

それなら、あんな馬鹿な絵はがきを書く代わりに、専科に行くのを止めたつて書き送つてから、俺を夏休み中避けていれば良かったんだ。

あんな白々しい理由を考える時間があつたなら、カミュの頭なら俺がカミュの隠したい事を嗅ぎ回らないようにする為のベストの選択が見えていた筈だ。どうしてそれをしなかつた？しなかつた事にカミュの意図が隠れているのか？

ブレインストームを殴り書きしたノートには、推理の手かがりより疑問ばかりが付け足されていき、季節はクリスマスシーズンに突入していた。

専科の授業オケの発表を終えて、息つく間も無く交響楽団のステージが巡ってくる。

専科の試験の合間を滑り抜けるようにして本番に漕ぎ着いた。演奏会には、聴衆としてサガとアイオロスも聞きに来てくれていて、他の卒業生と一緒に打ち上げに顔を出してくれた。もう制服ではなく、私服の彼らに打ち上げで顔を合わせるのとはなるとなくこそばゆかつた。

顧問のブラウン教授、それぞれのパート・リーダー、団長、コンマス、みんなからのコメントが続ぎ、恒例の懺悔大会も一段落し、アルコルが「ジュース」と称されて下級生にも回つて来る頃、有志での余興演奏が始まつた。今年のトップバッター

はトランプペットのダン・ウォルターだ。本番で外してしまつた屈辱を晴らしている。と、ジョシユアが俺の服の袖を引つ張つた。

「僕が伴奏してやるから、今度はちやんとやつてよね」

え、と思ひ、どうやらこの自棄とアルコールのお陰でハイになつて騒いでる人間の中で、余興演奏を買つて出るつもりなのだと思ひついて二度びつくりした。

俺がジョシユアの意外な行動に目を丸くしている間に、彼はさつさと俺を引き摺つてピアノの前に立つた。

「クロイツェル。こないだ授業でやつたから譜面無くても出来るでしょ？」

既にピアノの鍵を見詰め体を研ぎすましているジョシユアが、ミロが出なすぎや僕が出れない、と低い声で言つた。専科に行つて、デュオの授業はジョシユアとのペアになつた。この三ヶ月、散々一緒に弾いてきた。今日、一つ本番を終えたばかりだというのに、ジョシユアの瞳はこれから弾く曲の事にギラギラ輝いている。

凄いい奴だ、と思ふ。そして、こんな風にカミュと合奏できたら良かったのに、とも思ふ。

カミュと選択授業で、ペアを組んだ一年間は、どうしてもカミュの表現に合わせられなくてもたつてばかりだつた。もし、今の自分がある時の自分と入れ替わる事が出来たら、もう少し、カミュを喜ばす事が出来たんじやないかと思つてしまふ。

俺は、ゆつくりと息を吐いて、臉の裏に浮かんできたカミュ

の姿を胸の奥に沈めた。目を上げれば、少し離れた場所に、期待に満ちた眼差しで俺を見守つているサガの姿が見えた。

この楽器を貸してくれたサガを、失望させるような演奏はしちゃいけない。

ゆつくりと、俺は思考の幅を狭めた。ピアノの前に座るジョシユアと、指に触れる乾いた楽器。微かに臉を下ろし、俺はピアノニツシモで始まる重音の鎖を手繰り寄せ、音楽の扉を開いた。低く、高く、交互に打ち寄せる波のようにヴァイオリンとピアノが絡み合う。音の尻尾を受け渡し合うように。そして互いの挑戦が始まる。ヴァイオリンなんて、音量でも音数でもピアノに適うはずがない。それをどうやつて対等に弾くか。

もつともつと音の色数が欲しい。もつともつと自在に音の響きを操りたい。

ただ早いだけじゃなく、ただ奏でるだけじゃなく、俺の音が変われば、ジョシユアの音も変わる。俺が音を歌えば、ジョシユアがまた歌い返す。

いつの間にかホールの喧噪が、水を打つたように静まり返つていた。

ベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタ九番。通称「クロイツェル」

七分程の一楽章の演奏が終わつたとき、チラツとジョシユアを見ると、彼の集中は途切れていなくて、俺はそのまま二楽章に入った。

ふと、目の端に赤が映つた。

視線をそこに走らせると、まるで彫像みたいなカミュの姿が見えた。

じつと、俺を見ている。音を、聞いている。

一音も聞き逃さない真剣さで、カミュは俺のヴァイオリンを聞いていた。

どうして、カミュが食い入るようにして俺の演奏を聞いているんだ？ 腑に落ちない。

けれど、その感覚は、列車に乗っている時に目の前の景色がさつと流れて通り過ぎてしまうように、俺の感覚から消えた。

今は楽器を弾いている。体が、それ以外の事に使う感覚を遮断した。

三楽章通して演奏しきれれば、ホールには拍手が鳴り響いていた。ジョシユアの口元が満足げに緩んだ。

「ほら、こっちの方がシャーロック・ホームズなんかよりよっぽど受けてる」

ジョシユアの瞳が意地悪く光った。拍手に野次や口笛が混ざり始めている。

「だから、そういう事は、その時に言えつて……」

ジョシユアの得意げな顔に苦笑で応えて、目をホールの中に走らせた。演奏の途中で見たカミュの姿を探したんだ。

どうしてカミュはあんな顔をして人の演奏を聞いていたんだ？

ムウ・アリスンが、苦虫を潰したような顔をしている。サガは凄く嬉しそうな顔で、ロスはちよつと唇の端を上げて、シャー

ロック・ホームズが好きだって言ってくれた新人生のフィリップ・アネットも興奮してるって感じで手を打って今の俺たちの演奏に好意を返してくれている。

あ、と思った。

どこにも、赤い色が無い。

カミュの姿が、ホールに無い。

まだ一次会の余興で、これからどんどんみんなハメを外していく、盛り上がりつつしていくのに、カミュの姿だけが、いつの間にか、こつ然と消えていた。

俺は凄かった、と言いつけてくれる仲間を遮って「カミュ知らない？」と聞いた。みんな怪訝な顔をして俺と一緒に成り代わりを見回し始めた。

胸に、黒く冷たいものが一杯に広がって、息がどんどん細くなっていった。

と、その時、アンソニーの手が慌てて上がり、みんなの視線がアンソニーに集中した。

「あの、カミュはちよつと舞台でかいた汗を冷やして風邪をひいたみたいだから一足先に寮に帰って言っていました！ 心配しないで下さいって、言っていました！」

慣れないアナウンスに、顔を真っ赤にしながら精一杯の大声で役目を果たしたアンソニーは、すぐにこそそこそとピオーラ集団の中に潜り込んで姿を隠した。俺は、走って行ってアンソニーの腕を掴んだ。

「カミュ、風邪ひいたって、一人で帰って大丈夫なのか？」

「あ、ミロ！ さっきの、凄かったね。迫力だったよ……いやもう、僕らになんか逆立ちしても真似出来ないって言うか、はああああ。どんだん上手くなってるね」

「Thanks! でっ、カミユは？ 一人で帰したのかよ？」

少し苛ついてアンソニーに再度聞き込むと、アンソニーは慌てて答えた。

「や、ちゃんと立ってたし。早めに対処しておきたいだけだから、騒がないでくれて。僕も一人で大丈夫？ って聞いたんだけど、大丈夫だって言うし……ほら、カミユってあんまり心配すると逆に恐縮しちゃって具合悪くなれない所があるじゃないか。だから……」

俺は捕まえていたアンソニーの腕を放すと、ホールを出て管理事務室に行った。守衛に頼んで電話を貸して貰う。

スミス寮の医務室に(02)を掛けてミセス・ベルリッジが電話口に出るのを待った。口早に、カミユが風邪をひきかけて打ち上げを早退して寮に戻っているはずなんだけれど、医務室に顔を見せてませんか、と尋ねる。Noと答えて返ってくる。ひやっとした俺に、ミセス・ベルリッジの落ち着いた声が重なった。

「ハウス・マスターに連絡するからそのまま待っていなさい」と。待ち受け音が流れる受話器を握りしめて、自分が寮に戻って確かめた方が早いんじゃないかとじりじりした。と、カチャッと軽い金属音がして単調な機械音が止んだ。

「もしもし？ フェアアックスかい？ 連絡をありがとう。今部屋に行つて見て来たが、ちゃんと部屋で休んでいたよ。エ

インズワースも今晩はまだ居るし、本人も早めに対処したから大丈夫だろうと言っていた。交響楽団の皆さんに心配をかけて済まないと言っていたから、あまり心配せず、そちらはそちらで楽しんでおいで。それから、大きい方のインズワースとチエトウインドが来てるそうじゃないか？ よかつたら私の家に寄つて行くよう伝言してくれるかな？ それじゃあ、演奏会の成功、おめでとう！」

明るいキャプテン・ベネットの声を聞いて、少しだけ、胸のつかえが薄れた。

ホールに戻つてスミス寮のハウス・マスターからの言葉を皆に伝えると、やっぱりみんな一樣にほっとした顔を見せていた。飲み(02)二次会が始まって(既にある程度のアルコールはみんな摂取してたけれど)、最上級生以外は追い出され、俺はスミス寮への道のりをアイオロスとサガと一緒に歩いていた。

二次会に残らないのか、と聞いた俺に、アイオロスは半月の形に唇を引き上げて「高い酒をねだつてあるんだ」と、さも愉快そうに肩を揺らして笑った。

サガは、そんな上機嫌なアイオロスの隣で、今までと変わわないちよつと困つたような、でもとつてもやさしい笑顔を映かせてアイオロスを見た。それし俺とジョシユアの演奏を褒めてくれた。

「そう言えば、サガとロスは一緒の大学でしょ？ 寮はまた一緒？ それとも別々？」

俺がまだ全く未知の世界である大学生活の事を聞くと、

「大学が一緒だったって、お前、あそこに幾つかカレッジがあるか知ってるのか？ 三十九だ。大学の名前が一緒でもこいつと俺は別のカレッジ。お前に分りかやすいよまに言えは寮が違うの。ちなみにカレッジ毎に独立自治。財布は別だし、伝統も、行事も別だからカレッジが違う上に学部も違えば殆ど赤の他人だ」
えつ……と息を飲んでサガを貞詰めた。サガはまた困つたように微笑んで、

「でも、一緒にフラットを借りたから……毎日顔は合わせているよ？ 本当は最初の一年はカレッジの寮に身を置いた方がいいのだからけれど……私は楽器が弾きたいし、一人で楽器が弾けるような部屋を借りるのも不経済だから……」

話しながらじよじよにサガの声には「困った」っていう色が強くなり、頬に血の気が上がってきているようだった。

「おい、足が遅くなってるぞ！ 早く行ってやらにやキャプテン・ベネットの脛がくっついて旨い酒飲み損ねる！」

長い足でさかざかと先に歩いて行っていたアイオロスが、首だけ捻ってサガを呼んだ。

サガは、アイオロスの声にはつとして、それからまた「困つたなあ」っていう、でも特別甘い色の「困つた」を瞳に浮かべて、「早く行かないと、ロスがミスター・ベネットのお酒をキャビンごと飲み干しそうだ」

と俺に囁き、アイオロスの隣に並んで歩調を合わせた。

サガの髪は六月より幾分伸びていて、緩く後ろで一つに括つている。サガの指と、Tシャツの上にながしりとしたジャケッ

トを羽織つただけのアイオロスの指が一瞬お互いの指を探り合つてすぐに離れた。まるで、指先で会話をしたみたいだった。ああ、サガはちゃんと幸せにロスと生きているんだ、そう思った。

最初は、なかなかサガがロスと恋人同士だという事を受け入れられなかったけれど、今は、この幸せそうなサガを見て心から嬉しいと思う。

寮に戻って、リアの部屋のドアをそつと小さく三回ノックした。

ドアは暫くすると、そおーつと開いて、リアが出て来た。

「カミュ、どう？ 打ち上げの途中で風邪ひいたつて一人で帰っちゃったんだけど……」

「おう。まあ、顔色悪かったし、目もちよつと潤んでたから熱が出始めてるのかもな。医務室に行くか聞いたんだが、今ならすぐに寝れば薬を飲まなくてもなんとかなるからって。あいつ、母親が薬学部の出だろ？ やたらな薬飲むなって言われてるらしいから、俺も飲みモンだけ作つてやつて後はそつとしてる。多分もう寝てると思うぞ？」

リアの言葉にほつと息を吐いて俺は言った。

「大事にならなければそれでいいんだけど……。サガも心配してたし……」

「……あの馬鹿兄貴が来てんのか……」

「うん。今二人でキャプテンのところに居る」

「そっか……。じゃあ、ちよつと俺も行つてくるかな……。明

日カミュの様子見て帰る時間考える事にするから、兄貴に伝言頼む」

「そうしてくれると助かる。俺、明日朝一番の列車に乗って空港に行かなきゃならないから……」

「イタリアに行くんだっけか？」

「うん。ローマ」

廊下でひそひそ声の会話を続け、ドアの側を離れた。リアはハウス・マスターの居住区であるスミス寮の東翼の離れに、俺は自分の部屋に向かうために。

明日から、ミズ・エヴァンスの紹介で、何人もの優秀なヴァイオリン奏者を生み出している事で知られているローマ音楽院の教官の家に行く事になっている。クリスマス休暇無しで一ヶ月。

ジョシユアなどは、自分もウイーンに行つてなるだけたくさんの演奏会を聞いてくるつもりだけれど、高名な先生に一ヶ月も師事出来るならそれも羨ましいと騒いでいた。家の手伝いが出来なくなる事と未だに解けないカミュの事を考えると、行く足が重くなるが、与えられた機会は、二倍にも三倍にも活かさなければいけない。

それは、分かっている。

それに環境が変われば、何かのきっかけで新しい発見もあるかもしれない。そう自分に言い聞かせて、カミュにぶつけた疑問と、それに対する考察を脈絡もなく書き留めているノートも、俺はイタリアに持つて行く荷物の中に入れた。

荷造りは簡単で、あつと言う間に済んでしまふ。

演奏会の興奮を持って余して緩まない頭がキンキンに目を冴えさせて、俺は、目覚まし時計をセットすると、一度リュックに突っ込んだノートを取り出した。そして、きれいなページを丁寧にカッターで切り取つてカミュに手紙を書いた。

みんなが心配していた事、サガとアイオロスの様子。明日からイタリアに行くので挨拶出来ないが、風邪、無理しないでちゃんと治して、楽しいクリスマスを迎えて欲しいこと。

カミュに向けて書きたい本当の言葉は疑問系ばかりだということに……苦笑しながら、なるだけ丁寧に文章を書いた。書き終えた紙を四つに折り畳み、リアとカミュの部屋のドアの下の隙間に紙を押し込んだ。

もし、カミュからまた「Happy Christmas」なんてカードを買つても、今度は怒りなんて感じしないだろうな、と思いつながら、明日の朝にはリアが気が付いてカミュに渡してくれる事を願つて、メモを指先から押し放した。

今度カミュからクリスマス・カードを買つたら、Happy Birthdayのカードを買つた時のように胸の中に冷たい湖のようなものを感じて、寂しくなつて、それでも、それを大事にしまつておくんだろう。

いつかカミュの真実に辿り着いて、それをカミュに突きつけるその日まで。

翌朝、真つ白な霧の中、サガのヴァイオリンと着替えの詰まつたリュックを背負つて、俺はクイーンズベリを後にした。

イタリアのワイウミチーノ空港からローマまでレオナルド・エクスプレスでテルミニ駅まで三十五分。住所の書かれたメモをタクシートの運転手に見せて後はお任せでローマの街中を走り抜け、旧市街の北側ボルゲーゼ公園を少し過ぎた所で車を降りた。

オリーブとオレンジの木が門の向こうに見えた。石造りの門の真ん中に黒い鑄型の門扉があつて、見る限りブザーのようなものが無い。どこか裏口にベルがあるのかしらと裏口か木戸のようなものを探して暫く石垣の周りをウロウロしたのだけれど、道をぐるりと回つてもこの場所に戻つてしまう。仕方なく勝手に黒い鉄格子の扉を押して家の敷地に入った。

高低入り交じつた灌木と、花が植えられている狭い前庭を通り抜けて、建物自体のドアに辿り着いた。木の扉の周り、もう少し範囲を広げてぐるり石壁を見ても、やっぱりここにもベルがない事が分かる。

仕方が無いので、手をグーに握りしめて扉をドンドンと叩いた。

一回、二回、三回、四回、五回、六回……連打で二十回くらい叩いてみる。

それでも返事がない。

住所を間違えたのか、留守なのか。もし留守なら一目カミユの顔を見てから来たかもしれないのに！ イラッとして特大の一撃をドアにお見舞いしたら、スカッと扉が開いて、厳めし

い顔をした結構横に膨らんで来ているおじさんにジロツと睨まれて一言。

「楽器を弾く人間なら自分の商売道具を疎かに使うな」

ベルかドアノッカーが付いてればこんな事しないし、居るんならとつと対応してくれればいいじゃないか……とは、流石言えなかつた。多分、この人がミズ・エヴァンスの云つた、ロベルト・ドニゼッティ、これから一ヶ月俺が師事する人だ。

俺は慌てて下に下ろしていた荷物を担ぎ下ニゼッティの後を追つた。

「うちは出入りする人間が多いからいつも鍵はかけていない。勝手に入つて来ていい。門限は十時だが、お前はまだ未成年だな？ じゃあ、六時だ。朝食と夕食は必ずうちで食べる事。昼飯は勝手にして構わんが、もし料理が出来ないのなら女房に言つて作つてもらえ。今うちには六、十三、十六と娘が居る。これの部屋に入つたら問答無用で破門。四人のローマ音楽院の学生を預かつてるが、こつちはもう大人だ。せいぜい遊ばれないように気を付ける。男は犬のマリオと俺ともう一人音楽院の作曲料のパオロだけだ。細かい事はパオロから聞け。それ、ここがお前の部屋だ」

螺旋状の階段を登つて三階に辿り着くと、四つあるうちの一つのドアを示された。恐る恐るドアを開けてみると、中はこじんまりとしてクリーム色の生地にブルーのストライプとアドウの葉と蔓がプリントされた壁紙、押上げ式の窓。窓からは陽もよく入っていて白いレースのカーテンが綺麗なドレープをつ

くつて脇に寄せてある。ベッドは小振りだけれど、分厚いマットレスにたつぷりしたキルトの上掛けと枕が四つ、並べてあった。ベッドの反対側にはきちんと書き机もあって、はつきり言つてクイーンズベリーより明るくて広くて綺麗だ。

俺が部屋に見とれている間に、案内してくれたドニゼッティは居なくなつていた。

少ない荷物を適当に片付けたら、あとはする事が無い。どうしたものかと思つていたら、クローゼットの奥に、どうやら忘れ物らしい KAYSER が三巻揃つて転がっていた。

ランチはテルミニ駅で済ませてきてしまつてゐるし、門限と言われた六時までにはまだ大分時間がある。

この空いた時間で、全部弾ききる事が出来るかな？

部屋の隅に片付けてあつた譜面代を引つ張つて来て、KAYSER の一巻を開いてみた。懐かしい。もう何年も昔にやつたものなのに、体つて覚えてるもので殆ど暗譜状態で弾ける。

一巻が終わつて二巻、三巻と進めていくうちに初めての場所に来たさわざわとした落ち着かなかつた気持ちや、気になつて仕方がないカミユの事も収まつて来た。

夕食が済んだら、電話を貸して貰おう。ニア・ソーリーの家と、リアの家に電話を掛けて、もし、リアがまだ戻つていなければ、スミス寮に電話を掛ければいいし、戻つていたら、リアから話が聞ける。

「あのね、」

子供特有の高い声に振り返ると、ドアの隙間からちいさな女

の子が覗いてた。ああ、この子が、六歳の子なのかな、と思つて戸口に行くくと晩ご飯が出来たからお母さんが呼んでいると言われた。

「ありがとう！ もうそんな時間だつたんだ！」

慌てて一階まで駆け下りて、食事の匂いをする部屋に足を進めた。大きなダイニングテーブルにさつきの子とともう少し年上の女の子達二人、小柄でほつちやりとしたおばさんとドニゼッティが居た。

食事の前に一通り挨拶をして、女の子達は下からラウラ、クラウディア、マリア、ドニゼッティの奥さんのアンナ、ドニゼッティ、猫は三匹、パオラ、エルナ、ルチア、犬はマリオ。五人と四匹の家族に音楽院の生徒が四人。大所帯だ。

学生達は今日はみんな夜遅くなる、という事で先に始まつた夕食、お皿に野菜を取り分けてもらつてゐる時に、ドニゼッティにポソリと言われた。

「小僧、エチュードを練習するのはいいが、作曲までするな。」

エチュードというのはさつきまで弾いていた KAYSER の事だ。
「え……？ 作曲 しましたか？」

思わず首を竦めてドニゼッティを見たら、ぶすつとして見える顔でまた一言。

「していた。食事の後本を持って来い」

うわ……。初日からダメだし……。別に、褒められようとは思つてないけれど。

サラダのひよこ豆を覗き込んだら、「ロビー、食事の時に音楽の話はルール違反よ」と奥さんのアンナの明るい一言。話は何の家族や学校の事に移っていた。

食事の後、奥さんのアンナに断つて電話を借りた。国際電話だから手早く済ませないと、とメモを片手に電話の前に立つたら笑われた。電話くらい気にしないで使いなさいって。

まずは、ニア・ソーリーの実家に無事着いてる事を連絡して、母さんが奥さんに一言挨拶をしたいというので電話を変わってもらう。俺と喋った時間の三倍は軽くお喋りしていた。次に、リアの家に電話を掛けると、リアはもう戻つていて、カミュも発熱せずに済んだので途中で一緒に帰つて来たと言っていた。取り敢えず、以前のように風邪をこじらせたりしなかつた事にはっと胸を撫で下ろして電話を切った。

夜中に忍ばせた手紙について何かカミュは言つてたかな、なんて言うのは甘い期待で、リアが特に口をしなかつたつて事が答えなんだろう。

その後、ドニゼッティに言われた通り KAYSER を持つて行くくと、早速鉛筆で丸を次々と付けられた。と、その時気がついたのでだけ、この KAYSER だってまさらの新品なんだ。という事は、あそこに置いてあったのも偶然じゃなく、わざとなのか？

頭を捻つていると、女関が勢い良く開いて頭の上でキヤラキヤラ話しているような賑やかな会話とハイヒールの足音が響いてきた。

「先生！ その子が新しく来たお弟子さんですか？」

真つ黒なウエイビーヘアの結縛身長も骨格もしつかりしている女の人が居間の前で足を止め、次いで後ろからくすんだプロントを頭の後ろでお団子にまとめた人とブラウンのボブカットの女の人も部屋に入つて来て、三人一遍に話だした。流石に訳が分からなくなつた。

喋りたいだけ喋つた女性軍団が、嵐のように去つた後、初めてその後ろにひよろつとした黒髪のちよつと気の弱そうな男の人に気付いた。

ああ、この人がパオロだな、と思つて、挨拶しようとしたら、そつとパオロの方から近寄つて来て、

「君、この家のドアには鍵が無いからね、悪い事は言わない。明日にでも直ぐに鍵を買つて来てドアに付けた方がいい」と、まるでミステリー小説の直ぐに殺害されてしまふキヤラ

クターみたいな事を囁いてそつと階段を上つて行つてしまった。本格的な指導は明日から、朝は七時までには起きる事、と言われ、俺はそうそうに部屋に戻された。

ドアを開けて、それから閉める。

部屋の中を見れば、特に誰かが入つた形跡も無い。

この家のドアには鍵が無いって、だつたら付けなきや行けないのは先ずは女の子達の部屋じゃないのか？ なんて男の俺が？ と思いつつ今日はさつきと寝てしまおう、と着替えてベッドに潜り込んだ。

そして、深夜、パオロの忠告の意味が分かつた。

四階の女性専用階から、音楽院生トリオが殆ど裸に近い下着姿で人の部屋に雪崩れ込んで来たんだ……。

後であれば水着だつて彼女達から教えてもらつたけれど、その時は心底焦つた。押し付けられる体を押し退けて、パオロの部屋を叩いて中に入れてもらつと、彼の部屋にはしつかり門が取り付けてあつた。

「何!!! あれ!!!」

素手で押し退ける訳にいかなくて使つた枕を握りしめて声を抑えて叫んだら、

「だから言つただろう……? 女はデュオになつたら口では勝てない。トリオになつたら核兵器より強いんだ」

ローマに着いた最初の晩、俺は上級第六学年になるまでお預けの夢の一人部屋を、ベッドに入つてから二時間で追い出され結局男二人部屋で夜を明かした。

翌日から始まつたドニゼッティのレッスンというのは、朝に課題曲を渡されて、夕食事の前にドニゼッティの前で弾いて指導を受ける、というスタイルだつた。最初の一週間、ドニゼッティは毎晩ピアノの椅子に腰掛けて、腕を組んでじつと俺の演奏を聴き、小さなナイフで削つた鉛筆を手を持つと、徐に俺の楽譜に書き込みを始める。

「お前はここのフレーズをここからここまでの塊だと思つて弾いているだろう? だが、もしここからここまでと考えて、この波がここに繋がっているとしたら、お前はどうか弾く?」

「気分が弾くな。もつと全体を考える。作曲家はお前達みたい

な技術屋に気分が弾かせる為に五線紙に音譜を刻み付けてるわけじゃないんだぞ」

「部分に拘りすぎるな。全体あつての部分だ。先に作曲家からの奏者に向けての手紙を言つてるのかよく見てみる。それからその内容を活かす為に部分を磨くんだ」

ドニゼッティ自身はヴァイオリンには手を伸ばさなくて、何か気に入らない所があると何度も俺に弾かせてどうしてそう弾くのか答えさせた。夕飯の後は、ホールに音楽を聞きに行き、毎朝起きたら次の課題が渡される。三週間目に入った頃からパオロに伴奏をしてもう機会が増え始めた。

「僕は本当は、教会のオルガンが専門なんだけどね」とパオロはドニゼッティの居ない間に、悪戯つぼく笑つて見せた。

部屋に鍵はつけたものの、なんだかんだと食堂に呼び出されては夜は音楽院の学生達と過した。日付が変わるまで音出しOKのドニゼッティの一軒家は「Mangiare Cantare Amore」の空気で満ちている。英訳すれば「食べて、歌つて、愛して」のうちに終わる一生。つて感しの人生に対する刹那的な哀惜を覆い隠してしまう讃歌の飛沫だ。

そして、クリスマス・イブの晩、揃つて特別な日のための服を着たドニゼッティの一家とやっぱり礼装した学院生達と一緒に、ドニゼッティの家族教会に行った。出かける前に、クリスマス用の服も持つて来ないのかとドニゼッティに呆れられて、なんだか昔も同じよき事言われたなあと思つた。結局俺はパオロの黒いタートルのセーターを借りて出かけた

けれど、こんな感じのセーター、カミュが持っていたな、と思つてまた少し胸が痛んだ。

教会につくと、ドニゼッティは神父さんと二三言挨拶して、その間にパオロはオルガン席に、俺は歌トリオに連れられて二階席に移動した。この教会で、ミサの手伝いをする為だ。

二階席には、すでに数人ローブを被った聖歌隊のメンバーが揃つていて、俺たちがどうやら最後のようだった。オルガンの音が響いてよく耳にするクリスマス・キャロルをメドレーで聖歌隊が歌っている。その間に徐々に下の席が埋まつて行き、やがて曲はラテン語のミサ曲に変わつて行つた。

天井を飛んで祭壇上に降るような、柔らかな滝のような歌声に、無性にカミュを思い出す。カミュの声は、ソプラノのボールの声に比べれば強く甘いアルトだったけれど、既に成人している彼女達の声に比べたらずっと細くて繊細な声だったのだと改めて思う。自信に溢れて響き広がつて行く声とは違つて、もつと一途に引き絞つた透明感とひたむきな声だった。

やがてソプラノとアルトのエリアが交互に聖堂の中を満たした。

ぞくりと皮膚が寒気立つた。

伸びやかに、バッハのミサ曲から抜粋されたエリアが降る。甘いヴェールのように、薄いオーロラのように。彼女達の声は天上ではなく、教会に居る人間の皮膚に纏わり付く。

信仰心があるわけでもないのに、何故か胸が苦しくなる。胸の中で何かが膨らんで、息が出来ない。現実のエリアの合間に、

記憶の陰からカミュのアルトが繰り返し繰り返し体の細胞を揺らして、まるで体が音を響かせる為の筐体になつてしまつたようだった。

ミサの間、立ち上がったたり、跪いたり、全真でラテン語を詠唱したりを繰り返して、聖体拝受のパートになつた。聖歌隊が有名なクリスマス曲を歌い、それを受け継いでバッハの無伴奏ソナタ第一番のフーガを俺が弾く。歌声の余韻が消えた教会の中に響いたつた一挺のヴァイオリン。音を出す一瞬前まで、不安だった。か細く聞こえるんじゃないかと。でもすぐにその不安を打ち消す。大きく聞こえる音が実際に大きい音ではない。

芯のある音。何処までも広がつて行く音。

一つ一つの音の密度に思いを寄せた。楽器を弾いていると、カミュのせいで傷付いた心から痛みが消える。楽しかった事も、嬉しかった事も、音の中に溶け込んで、俺という個人は、ヴァイオリンのためにあるような気がしてくる。

ヴァイオリンが好きだ。ずっと弾いていたい。そして、いつかその中に自分も溶けていってしまえばいいのに、そう思う。そうしたら、誰かに裏切られて悲しいとか、苦しいとか、そんな事思わないで済むに違いないから。

翌日、クリスマスは練習は休み、という事で、少しのんびり起きて階下に行くと、パオロが音楽室のピアノを弾いていた。「おはよう！ 昨日は大活躍じゃないか！ あれなら先生も鼻が高かつただろうな！」

クラシックじゃない、多分P.O.P.っていう分類の曲じゃないかと思う曲を弾きながら、パオロが陽気に挨拶をしてきた。

「そうなのかな？ 良いとも悪いとも言わなかったし、いつも通り撃め面してたじゃん？」

「君のフーガが聞こえて来た時、みんな一齐に二階席を見上げていたよ？ 先生もあの眉毛をひくつと上げて耳を澄ませてから後はのんびり座って聞いていたから花丸合格だろう」

俺はほっとしたのと手放して寝てもらえたのが照れくさくて、痒くもない頭を掻いてパオロの隣に椅子を持って来て座った。曲はイタリアの民謡に移った。

「でも、良かったっていつていうならクロエだつて凄かったじゃないか。俺より小さいくらいなのに、彼女のアルト、無理なくたつぷりと教会中をくるんでた」

「はははっ！ 君らしいな。君、歌が好きだろう？」

急に曲をパツハに変えて、パオロは聞いて来た。

歌は、特にこれまで好きだった訳じゃなく、たまたまパブリックで一緒にあった同級生達の中に凄く歌の上手い生徒が居て、それで彼らの歌を凄くと思うようになっただけだ。特に興味を持ってレコードなんかを聞いたりするわけじゃない、と正直に言うと、パオロは「俺はお前の秘密を知ってるぞ」みたいな顔で意味ありげにニヤツと笑ったので、内心かなり焦った。

まるで、俺がカミュの事が好きで、カミュの歌声にくらくらするっていうのがバレているみたいに感じたんだ。

パオロはピアノを弾いていた指を景気よくポンツと鍵盤の上で一跳ねさせると俺に向き合った。

「君は耳がいい分かなり一つの音の精度や色に拘るだろう？ 普通ヴァイオリンなんて高音域の単声楽器弾きはメロディーが好きなんだよ。華やかで、分かりやすい、思いつきりドラマチックでロマンチックなやつがね。でも、君はさっきアルトのクロエの歌が良かったって言っただろう？ ここだけの話、ソプラノのエマはメロディーに流されて音程や表現が結構甘いんだよ。その場の雰囲気や酔っちょやう典型的なお姫様ソプラノだ。でも、アルトっていうのはそういうソプラノ様達を支えつつ全体のバランスを保つて歌を作つて行く職人みたいな所があるからね。押さえつつ、でもきつちり攻めて来る。それに、高い声っていうのは女性なら訓練すれば誰でも出るようになるけれど、低い声を綺麗に響かせるっていうのは難しいんだ。だからアルトは音質に対してソプラノよりもう少し神経質で拘る傾向がある。特にクロエはまだまだ声が若いけれどテクニクはしっかりしているし、学院の教官のお気に入りだ。そんな彼女の声に惹かれる君も音フェチだなと納得したのさ」

自説の締めくくりに、 balan とグリッサンドをしてパオロはニコニコと俺の反応を待っていた。

「……音、フェチ………？ 俺が？」

「そ。君、なまじいい音に対する感覚が高いから、ついついそっちの追求に走っちゃって楽曲の分析が甘くなつちやう傾向があるだろう？ 主旋律だけ頑張つてガンガン弾いてくるヴァイオリ

ン弾きよりは好感持てるけどさ、それじゃ僕ら音楽家の意図つてもんがさ、空しいじゃん？」

「俺、そんなに無視してる？」

「いや、小曲や割と構成がはつきりしている曲ならそうでもないけれど、これからどんだん大作とかにも挑戦していくのに構成力がないと厳しいって話さ。これまたこだけの話、構成力があればそれなりに上手く聞こえるんだよ。そういうふう既に考えられて作曲されてるんだからさ。だから先生は『よく見る』って毎日君の楽譜に書き込みをしているわけじゃないか」

たつぷり五秒はパオロを見詰めた。そして、詰めていた息を吐いて言った「アドバイス、ありがとう……。注意するよ」と。パオロは「お易い御用さ」と破顔した。そして「ところでさ」と言つて腰を浮かしかけていた俺の動きを止めた。

「君の言つた同級生のソリスト達って君の友達？」

「え？ 一人は、友達って程親しく無いけれど、もう一人は二年間相部屋だった。今は、別々になつたけれど……。どうして？」

「いや、これは、僕の個人的な経験からなんだけどさ……」

パオロは俺が知つてる合唱曲をピアノで弾いた。フオーレだ。パオロはピアノに視線を落として、俺の事は見ずに言つた。

「君と同級生って事は、もう声変わりしたんだろ？ その子達。いや、僕もクワイヤに居ただけだよ……。結構、覚悟はしてるんだけど、シヨックなんだよ……。それまで周りがちやほやししてくれてた声が出なくなる、歌えなくなるっていうのはさ。なんか、一夜で自分の人氣が地に落ちるっていうか、普通の人になつ

ちやうつていうか……。しようがない事なだけだよ。でも、今まで大事にしてきた声も思いつきりみつともなくかわるじやないか？ 傷付くんだよね。」

君のさつきの話し振りだと、そうとう君はその子達の声が好きだったみたいだけれど、彼らが声変わりした後は君と彼らはどうなったのかなあと……。はは、余計なお節介なのは分かっているんだけどさ！ でも、君の目つて独特なんだよ、良く言えば物凄く情熱的、悪く言えば気持ち素直に出過ぎて……。彼らが君の賞賛する『声』を持つている間、君はきつと天上知らずに熱い眼差しを贈ってくれるんだろうなあ、つて。でも、それが無くなつたら、君の熱意も終わつてしまふだろう？ 自分でもどうする事も出来ない事で君からのその熱が消えてしまつたら、ちよつと、大人からちやほやされなくなるよりキツイかなつて……」

「ち、ちよつと待つてよ、パオロ！ 俺は、片方とはそんなに仲良くないけれど、それでも今でもそいつの事は尊敬してるし、もう一人は……。大事な、親友だよ！ 俺は、そりや、彼の声が凄く、今も好きだけれど、でもカミュのピアノだつて好きだし、誰よりも凄く音楽家だと思つてる!!」

パオロはピアノの手を止めて俺を見上げた。俺はいつの間にか椅子から立ち上がつてパオロに向かつて叫んでいた。

カミュが声変わりしたからつて、俺はカミュに対する思いも態度も少しだつて変えてない！

「カミュつて子、ピアノ、弾くんだった……そりや、気の毒に……」

ボツン、と零されたパオロの言葉に一瞬カッとなった。

何が気の毒なんだ？ カミュのピアノは凄い。あの、カミュの、ブゾーニのシャコンヌをパオロは聴いた事が無い。それなのに、勝手にカミュのピアノを侮辱するな、そう思った。

「ピアノつてのはさ、ザルなんだよ……」

三度の和音を作つてパオロは呟いた。

「一遍に六つでも七つでも音が出せて、一つの楽器でこんなに広音域をカバー出来る楽器はない。だから作曲家はオーケストラの曲でもピアノがあれば作曲出来る。でも、ピアノじゃオーケストラの音の厚さは再現出来ないし、何より音色を出すのに限界がある。息使いや弓使いで自在に限界に挑戦出来る楽器とは違う。ましてや人間の声の表現力に比べたら……。その子が、君にそれだけ言わせるだけの声や表現力を持つていたのなら、なおさらその子自身が身にしみて声とピアノつていう楽器の違いが分かつてると思うよ」

「俺は……カミュが声変わりをしたからつて……何にも変わっちゃいないし、側を離れたりもしてない……！」

俺は拳を握りしめて、パオロを睨んだ。パオロは俺の剣幕にびつくりしてピアノの椅子から立ち上がった。

「や、ごめん！ 君を責めたわけじゃないんだ！ いや、ホント、ごめん！ 僕もさ、結構いい線いってんだよ、その、ボーイクワイヤでさ。で、彼女も居たんだ。かっこいいとか、凄いとかが、コンサートにも来てくれてさ。でも、僕が声変わりをした

途端あつさり他にボーイフレンドできたつてさ……。それが、その相手つて言うのが、僕の隣のアパートの奴で、そいつの事、彼女それまで勉強も出来なくて、玉蹴りしか興味ない、頭が悪そうでああいうのはタイアじゃないとか言つてたんだぜ？ いや、だからちよつとトラウマつて言うか……。いやあ……。ホント、ごめん！ 悪かつたよ、君達の友情に水を差すつもりはこれっぽつちもなかつたんだ」

パオロの身振り手振り付きの必死の謝罪に、俺の胸の中で膨らんでいた苛立ちの詰まった風船の空気が、音を立てて抜けていった。

「……いいよ……。別に。俺も、少し、心当たりがあるからムキになつた。ごめん」

「あああ、いやあ、僕、褒めてもいるんだよ？ 君にあんな風に目をキラキラさせて『凄い』とか『感動した』とか自分の音楽褒めて貰えたら、そりやあちよつと舞い上がりたくなるだろうなつて。それぐらい、君の『素直さ』つていうのは相手に自信というか、パワーをくれるし、そうやつてへんな嫉妬とかなしに他人の音楽を賞賛出来るつて言うのは、音楽家としては物凄いい美点だよ」

パオロの、俺を一生懸命持ち上げようとするその言葉と気持ちにお礼を言つて、俺は自分の部屋に戻つた。

そして、久しぶりにノートを開いてペンを握つた。

結局、まだ疑問ばかりだ。でも、カミュが専科に行かないと決意した事に関係があると思

「カミュに対する疑問」

A: 何故専科に行くのを土壇場になって取りやめたのか

- (1) 熟考の末、音楽は向いていないと思った
 - 白紙解答は専科に行かないと決めたから
 - しかし、満点の実技試験は筆記の後
 - 俺に聞きに来てくれるようわざわざ頼んだ←何故？
- (2) 俺が行くから止めた / 俺と距離を取るため
 - それなら最初から俺を誘わなければ良かった
 - 俺が合格するかどうかは未確定だった
 ↑ 俺が不合格だった場合、白紙解答を出したカミュは
 結局その意図を果たせない

B: 何故カミュは専科に行く事を俺に言わなかったのか

- (1) 俺に責められると思ったから
 ? あからさまに逃げれば余計に俺に負の感情を与えるだけ
 ? 夏休みの間に俺の怒りが収まると思った??
 → 先延ばしはカミュらしく無い
 ↑ それだけ言い難かった

※何故そんなに言い辛かったのか？

→ カミュの中に罪悪感が在った → 自覚が有った (自分の非)

★ 自覚してまで、何を隠したかったのか？

← 専科に行く事を止めた理由！

える。

そして、(1)の音楽は向いていないと思った、というのは嘘だ。筆記で故意に白紙解答をするなら、実技試験はキャンセルすれば良かったんだ。それを、もう専科に行かないと決意した筆記試験の後で、わざわざ俺にあのシャコンヌを聴かせた。あのシャコンヌは、満点を叩き出してる。あんな演奏は、音楽を諦めた人間の演奏じゃない。

(2)も、俺の面倒見るのに疲れたカミュが、つて考えたら一見辻褃が合うように見える。でも、そうしたらそもそも俺に転科の話なんて持ちかけなければ良かったんだ。ポールと一緒に仲良く専科に行つてしまえば、俺は指をくわえて二人を見るしかなかった筈だ。俺の合格の結果が出る前に専科に行く可能性を自分で潰してしまつたのもおかしい。本当に俺と距離を置きたかつたから、俺の合否を見極めて自分の進退を決めれば良かった筈だ。

そもそも、なんでカミュは俺に専科に行く話なんて持ちかけたんだ？

俺をその気にさせて俺一人転科させて、自分は普通科に残つて距離を置くため？

でも、それならわざわざあんなに必死になって、ぎりぎりまで自分を追いつめてピアノを練習しなくても良かった筈だ。

そして、カミュのその全ての努力の結晶であるシャコンヌを俺に聴かせる意味は何だ？

くそう！ また疑問ばかりだ！